
GODEATER—Go on STRUGGLING

新薙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R | G o o n S T R U G G L I N G

【Nコード】

N 0 6 3 4 0

【作者名】

新薙

【あらすじ】

「俺は、いつまで俺でいられるだろうか？」

少年は問う、喰われ滅び往く世界に。

——「アラガミ」——それは、突如現われた巨大な生物、人類の終末。

確実に不明確な終末を前に、人類の未来を委ねられた少年たちは、
残酷な「希望」に立ち向かう。

友情、恋、憧れ、過去、離別、そして――

奏でられるのは、終わりの見えない戦いへの序曲。

――I struggle to survive――足掻き
続けてやる、この命ある限り――

序章―始まり

それは、悪あがき。

どこまで走っても、

どれだけ走っても、

どんなに走っても、

無意味だった。

恐怖しかない。

泣きもしない。

叫びもしない。

ただ怖い。ひたすらに怖い。

その気持ちが焦りを誘い、ついには泥に足をとられ、汚水の中に倒れる。

―ズンッ

背後に

―ズンッ

もう迫っている。

——ズンッ

化け物が…

——ズンッ

逃げなければ、

——ズンッ

喰われる。

——ズンッ

でももう限界だ。

——ズンッ

逃げることに必死で、

——ズンッ

熱くなっていた頭を、

——ズンッ

泥水がひやした。

——ズンッ

もう、いいや

と、

——ズンッ

喰われても、いいや

と。

足音はもう、

聞こえない。

雨の降りしきる平原のど真ん中で、泥にまみれて死ぬ。

最悪だ。

でも仕方ない。

もう逃れられない。

もう……いいや。

諦めた。

けれど、

「悪いな、ぼうず。ちよいとばかり遅れちまった」

何故だろう。

彼の声が聞こえた瞬間に溢れだした、

頬を伝うこの熱さは何故だろう。

第1話―事件の後で

世界は、確実に滅ぼされようとしていた。

突如出現した巨大生物「アラガミ」。

始めは小さな細胞に過ぎなかった彼らは、地球上のありとあらゆるモノを捕喰しその体に取り込み、僅か数年で、人類を、生命を、地球を脅かす存在へとなっていた。

現存する兵器は何一つ齒が立たず、彼らにより一つの大陸が滅ぼされる。

人々は絶望の淵に立たされ…

「…あー…長いな、うん」

それっぽい説明よりも自分の言葉で簡単に説明した方がいいかと思っただが…

難しいなコレは。もう適当でもいい？

さんきゅな。そう。で、ヨーロッパのある会社が、オラクル細胞を研究してこの神機を作り出したってワケ。

すごいんだぜ？アラガミって。核も喰っちゃまえるんだってさ！

リンドウさんが言ってたんだよ。あゝ…懐かしいなあ…リンドウさん…新人の頃にはなかなかお世話になったしなあ…ってかまああの人に対する借りは大きすぎるんだけどな…

「あ、話が逸れたわ」

はははっ、と明るく気楽そうに笑う少年。

深い黒色の目と、光の加減でやや紺色っぽくも見える黒髪。
右手首では、赤色の腕輪が鈍く光を跳ね返している。

正式名称「P53アームドインプラント」。

それは、世界の盟主「フェンリル」の生み出した人類最後の希望、
「ゴッドイーター」の証。

外部居住区に面するゲートの下、大きめのフードのついた黒いパー
カーと入隊時に支給された制服のボトムスを着用している彼の周り
には今、七歳八歳くらいの三人の男の子が目を輝かせて座っている。

「なあなあ！にいちちゃんって、どんなアラガミと戦ったん！？」

少し訛りの混じったしゃべり方をする、若干クセっ毛の男の子が身
を乗り出す。この男の子たちとゴッドイーターの少年は、つい三時
間前、偶然出会って何となく話をし始めただけの間柄である。

「お？そうだな…」

真ん中で話をしていたゴッドイーターの少年は、少し思案したよう
な顔になる。

「うーん……」

せっかく話をするならおもしろい変わったヤツの話の方がいいだろ
うと彼は思ったのだが、

——アラガミ
ヤツらはどうにも言葉で表現するのは難しい。それに、興味を
持たせ過ぎると色々危険な事になり得るし、あまりにもリアルに語
ると逆に彼らを恐がらせてしまう。なんだ、昔々に流行った「怪談」

なんてヤツみたいだな…。

倒すのも面倒なのに説明するのも面倒ってか、と彼は心の内で笑った。

「あ、そうだ！」

アレなら、と少年は閃いた顔をする。

「金色のな、蠍みたいな形したヤツなんてすげえぞ！」

子ども達の目が期待に輝く。今時にしてはなかなか珍しく、目の前の少年達の純粹な心に、アラガミは恐怖よりも興味を抱かせるらしい。それに気を良くして、話し手の少年——アラガミ荒堵ソウヒは語調を強める。

「ボルグ・カムランってヤツの変異種でな。アナグラより遠いトコでよく見つかるんだけど、すっげえデカくてな！」

日が傾き始めようとしている極東の砦の内。
ゲートから民家から、何から何までを赤く染めている陽の下。

「あはは！ソウヒまだ喋ってたんだ！」

「暇なんだな、お前…」

「…」

開口一番にソウヒを笑ったのは、六灯ミズリ。リクトウ紫色のパーカーと短めのフレアスカートに包まれた彼女の背丈は百五十あるかないかく

らい。黒く澄んだ瞳は感情に富んでいるが、一番よく似合うのは笑顔で、ポニーテールにしてまとめている紺色の髪は腰にも届きそうな長さだ。

そしてその隣にいた背の高い真面目そうな顔つきの青年が折原ナツメ。オリハラ

黒のF武装上衣をアレンジした袖無しのジャケットの下には長袖のシャツの袖が覗いて、制式下衣ブラックを穿いている。落ち着いた雰囲気にとめられている赤毛の間から覗く同僚を見る細い目は、明らかな呆れが滲んでいた。

ミズリは十五、ナツメはソウヒと同年で十六歳だ。

そしてその彼らの後ろには、グレーのカーゴパンツを穿き、紺色のモッズコートフードを深く被った浅黒い肌と白髪の青年―ソーマ・シクザールが、やや不機嫌そうな表情で立っている。

「いやまあ確かに昼過ぎくらいからずっと喋ってるけど…お前の隊はそんな忙しいのか？」

話を中断し彼らを向いたソウヒは、少し首を傾げた。

現在ゴッドイーターは、それほど人数がいるわけではない。

遣伝子レベルで慎重に行われる神機の適合の審査・検査の為、適合する神機を待つ候補者に留まる者は多く、また、危険な未知の生物を相手取る職業柄、天寿を全うせずこの世を去る者も多いのだ。現に、この、フェンリル極東支部内で引退を果たした人物は片手で数える程だとか。

つまり、一支部内なら人手不足は尚更である。そしてこの極東支部は、とある一件の所為で強力なアラガミが集まりやすい。なので忙しいと他の部隊から助っ人を呼ぶのだが、最近は、新種こそよく見つかるものの以前の様に毎日毎日仕事ばかりでもない。

「いや、アンタも同じ部隊じゃない…。ソーマは偶然同じタイミン

グだったただだよ。平原の方で軽く体動かしてくるんだってさ」

「へえ…ナツメは？」

「俺は、ミズリにサリエルの討伐について来いって…」

アレはなあ…と言ったカンジで夏目がため息を吐く。彼の愛用する刀身、デスペアピックは、付与する事でアラガミの体力を奪い続ける事が可能なヴェノム属性を持っている。

「あー…がんばれ」

よくある話。サリエルにはヴェノムがよく効く。だからヴェノム属性の刀身があると結構楽という。

——…こればかりは、どうにもならないんじゃないかな？

「ってか、出撃ゲートは逆だろ？」

出撃ゲートはエントランス内でも真反対だったハズだ。

「あんたがどこにも居なかったから！」

「ソーマもわざわざ？」

「ヘリが同じなだけだ」

待つついでだ、と低い声は今日も不機嫌そうだ。

「そ。鉄塔の森と嘆きの平原は方向が同じでしょ？」

腰に手を当て、小さく溜め息を吐いた少女は、くるりとターンして再びゲートを潜っていく。

「じゃね〜。その子らそろそろ帰してあげなよ！陽も暮れそうだからね！」

ナツメとソーマも彼女に続き、後には創扉と子ども達が残された。

「あのフードかぶってたヤツ、なんか怖えな」

ボサボサと言う表現が一番適切な気をする髪、いかにもやんちゃそうな男の子が創扉のパーカーを引っ張った。

「あー、ソーマか…アイツはあんまり、ワイワイ騒ぐの好きじゃねえからなあ…」

だがアレでも丸くなった方だ。以前なら、誰かと行動を共にする事なんてなかったソーマである。

「あ。アイツ、十二ん時からこの仕事やってて、いろんなアラガミを倒してきてるんだぜ」

「すっげえ！」

「強いんだな！」

少年達の興奮はそう簡単には冷めそうにない。
が、先程ミスリに言われたようにそろそろ陽が暮れそうだ。

「あー、そろそろ陽が暮れるな…今日はもう帰った方がいいだろ」

「うん、ありがとーな!」

「また来るよ!」

「バイバイ!」

各々立ち上がり、ソウヒに手を振りながら走り去って行く。

「おー、気をつけて帰れよー!」

その彼らの背に手を振っていた創扉もまた、立ち上がると歩みゲートへと向ける。

だが、背後からかけられた声が、その歩みを止めさせた。

「ソウヒ、まだいたんだね」

「ああ、ヒロキ。それにアリサも」

少し笑いを含んだその声に振り返る。そこにいたのはアナグラで話題になっている、新型神機使いの二人だった。

「よつぽど、することがないんですね」

最初に話し掛けてきたのは朝倉ヒロキ。入隊して間もなく、弱冠十六歳の若さにして極東支部第一部隊のリーダーに就任した少年だ。明るい茶色の髪は鬱陶しくない長さで整えられていて、東洋人らしからぬ碧眼は常に優しく、彼がそのまま心優しい人間であることを表している。

そして彼の隣で、おかしそうに微笑む少女がアリサ——アリサ・イリーニチナ・アミエーラだ。ソウヒやヒロキとは一つだけ年下である彼女は、少し前にロシア支部より移動してきた新型神機使いで、特徴的な紫の瞳に、フワリとしたローズグレーの髪。袖無しで露出の多いダークグレーのトップスに、赤に白のチェックのスカート、スカートと同じ柄の帽子を身に纏うその少女は、配属当時の孤高な空気も遠く失せ、今では明るい笑みの似合う美少女としてアナグラ内で人気者となっている。

「俺はね、派手に動くと榊センサーに怒られんの」

やれやれ、と言った表情で肩を竦めてみせるソウヒ。アナグラ初の新型神機適合者としてヒロキが配属された直後に、二人目の新型神機適合者となった彼は、普通の新型神機使いではなかった。

「できるなら、俺だってもっと出たいさ」

でも、と腕輪を見つめ、寂しさとも諦めともとれる表情をするソウヒ。

「でもそれで、ミスリやナツメやヒロキやアリサに迷惑がかかるのは嫌だしな……」

——異様なまでの、適合率の高さ。
それが彼に制約を与えている。

「……『神機が暴走する可能性が高い』なんて、確証はないんだよね？」

「ああ、確かにそうなんだけどな……」

「それでもオラクル細胞の全てがわかっている訳ではありませんからね……」

三人の間に、暗い空気が流れる。

「そんな事より！この様子だと、ずいぶん順調みたいだな」

「何が…ですか？」

ソウヒの発言に首を傾げるアリサ。隣のヒロキも同様に、意味が分からないと言いたげな表情をしている。

「いやあ、ま、アレだよ。大変だろうけど、頑張れよ」

「だから何がですか？さっきからニヤニヤして」

アリサの声に僅かばかりの苛立ちが交じる。

「ん？だって、ゴッドイーターの結婚って、審査だか検査だかが必要なんだろう？」

「…？」

「ちょっと待ってよソウヒ」

ソウヒの発言についていけなくなったアリサに代わって、今まで黙っていたヒロキが慌てた様子で口を開いた。

「僕とアリサはそんな関係じゃ……」

慌てに足して顔までやや赤くなっている。
待ってましたと言わんばかりにソウヒのニヤケが増したのは、言う
迄もない話だろう。

第1話―事件の後で（後書き）

せっかくなので、後書きを設定紹介の場としても利用しようと思います。

書き方も、なるべくノルンのデータベースに近付けたいと思います（・・ω・）

人物

荒堵ソウヒ：1

（16）

2071年フェンリル極東支部入隊。

第四部隊所属の神機使い。数少ない新型神機使いだが、偏食因子適合率が前例を見ない高さの為に攻撃制限をかけられている。

神機使いになって日は浅いが、実戦では高い成績を残している。

神機：バスターブレード・ブラスト（新型可変式）

折原ナツメ：1

（16）

2067年フェンリル極東支部入隊。

歳は若いが実力は申し分ない。柔軟な思考と高い身体能力の持ち主で、従事する任務に偏りのない第四部隊を取り仕切る。

神機：ショートブレード（旧型近接式）

六灯ミズリ：1

（15）

2068年フェンリル極東支部入隊。

銃の制動力が高く、優れた判断力を持ち、激しい銃撃で敵を引き付ける戦い方を得意とする。一方、狙撃・隠密行動は苦手である。
神機：アサルト（旧型遠距離式）

第2話―神帝と異変

「にしても…いつの間にそんな話に…」

額に手を当て、溜め息を吐くヒロキ。

暫らくゲート前で立ち話―といっても殆ど創扉が二人をからかっていたのだが―をした後、三人はゲートを潜り、エントランスに踏み込んだ。

「結構前からあがってたぜ？」

エントランスは人气が少なく、がらんとしていた。

「あ、皆さんお帰りなさい」

「お帰り〜」

受け付けで雑談に興じていたらしい二人の少女が、ソウヒらに気付く。

「ただいま〜」

「ただいま、ヒバリさん、リツカさん」

「ただいま帰りました」

ソウヒ、ヒロキ、アリサの各々が返事をする。そのままの流れで、ヒロキとアリサはオペレーター少女、竹田ヒバリに任務の報告を

始めた。

特にこれと言った用事があるワケでもないソウヒは二人を待つことにする。

「どう？調子は。何か違和感とかなかった？」

もう一人の少女がソウヒに声をかけた。アナグラで神機の整備士を努める楠リツカだ。

「ん？大丈夫だったよ。変形も捕喰も、どこも変じゃなかったし」

「そう？良かった！」

ソウヒの返答に安心の様子を見せるリツカ。神機の整備を任される彼女は、神機の使用者の心配も怠らない。

「あ、そういえば、何の話してたの？」

なんだかおもしろそうな匂いがするんだけど、と彼女はイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「え？ああ、ヒロキとアリサは一体どこまでの仲なのかって話をね」

「え、ちょ、ちょっと！ソウヒ！？」

「へえ……」

ヒロキが気付くも時既に遅く、リツカまでもが「おもしろいネタ見つけた」と言いたげな顔をしていた。

ただ、任務の報告が終わり、アリサとヒバリが完全に二人の世界で

話し始めていた事は、彼にとって幸いだったかもしれない。

「で、ホントのトコロはどの辺まで？」

受け付けから少しだけ離れ、ソウヒがヒロキの肩に手をかける。

「いや…僕らはそんなんじゃ…」

「なら、ヒロキはアリサのコト、どう思ってるの？」

ソウヒと反対からヒロキの肩に腕を回すリツカ。

逃げられない、という絶望感にヒロキは襲われた。

「……………う…そりゃあ、リンクバーストや回復弾の回数なんかは僕より多いし、神機の変形も早いし、射撃も上手いし、連携もしっかり合わせて——」

「……………」

なんとか誤魔化そうと奮闘する彼を二方から見つめる計四つの半眼が「そんなこと聞いてるんじゃない」と彼を威圧する。ヒロキの額に汗が滲んだ。

「……………」

無言の圧力は、尚も彼を苦しめ続ける。ついでに言えば、彼の両肩も二人の無意識の握力により苦しめられている。

ヒロキの額に滲んでいた汗が、重力に従い頬を伝った。

彼らの後方では、やはりヒバリとアリサが楽しそうに談笑している。彼女らの声がエントランスに明るく響き渡っていた。

「……可愛いつて…思ってます」

俯く彼は、辛うじて二人が聞き取れる程度の声で呟いた。

「それだけ？」

「それ以外に何が――」

ソウヒの追い討ち（？）に対して、顔を上げたヒロキの言葉はそこまでだった。

「ソウヒさん!!」

今までの穏やかな空気を一蹴するヒバリの切迫した声に、ソウヒらは一斉に振り向く。

「ヒバリさん？」

「サリエルの討伐任務に当たっていたナツメさんから、討伐対象外ディアウス・ビターの神帝と遭遇したとの報告がありました！」

「!？」

「うそっ!？」

傍らで経緯を聞いていたリツカが、悲痛さの滲んだ声を上げる。

「サリエルとの交戦中に、だそうです」

「んな…」

ソウヒの握り締めた拳が小刻みに震え、頼りなく宙を彷徨う。
伝えられた状況にシヨックを受けるソウヒに替わって、冷静を保っていたヒロキが口を開いた。

「鉄塔の森だったよね、ヒバリさん？」

「はい。ヘリの準備、完了しています」

「リツカさん、神機は？」

「大丈夫、メンテナンスは終わってるよ！」

「ありがとう！」

「お願いします！気を付けて！」

ヒバリが神機使い三人に言う前に、内一人、ソウヒの姿は消えていた。

ターミナルで素早く準備を整えたヒロキとアリサは、出撃ゲートを潜る。

エレベーターで屋上にあがった二人がヘリに駆け込んだのとはほぼ同時に、ヘリが離陸する。

既にヘリの中にはソウヒがいた。彼専用塗装を施した紺碧の大鋸、彼が愛用する刀身『野狐斬り』の背を肩に、ヘリのドアのすぐ傍に座り込んでいた彼は乗り込んできた二人を見て驚きの表情を見せる。

「お前ら…」

「気にしないでください。幾ら隊が違うと言っても、ナツメさんやミズリはアナグラの仲間ですから」

「そうだよ。さっきの任務なら、相手にしたのは雑魚数匹だったしね。それより…」

ミズリは大丈夫かな？とヒロキが話を変えた。

ソウヒから滲み出ていた焦りと苛立ちが濃くなった。

ディアウス・ピター
「神帝…」

呟いたのはアリサ。

ロシア支部より移動してきた彼女には、ヴァジュラと言うトラの様な姿をした種のアラガミに、トラウマの様なモノがあった。

原因は、彼女の両親が、喰われたこと。神帝に。

六年前、彼女の生れ故郷、ロシアで。

幼い彼女の、その目の前で。

「ミズリ…」

今の彼女は、ヒロキをはじめとしたアナグラの、第一部隊の仲間達のお陰でそのトラウマに打ち勝っている。が、トラウマを抱えているのはアリサに限った話ではない。

六灯ミズリという少女は、過去にあった出来事に今もなお縛られ続けている。

「アレは…不幸な事件だった」

彼女に関するその事件のを知る人は皆、口をそろえてそう言う。何が起こり、どうして彼女がそうなったのか、ソウヒは知らない。

ただ、以前任務後に偶然ヴァジユラに遭遇した時の彼女は、何を言うでもなくひたすらに叫び続けていた。その有体が普段の活発で健康的な少女とは思えないほど痛々しかったのは、時間が経った今でも鮮明に覚えている。

「ナツメの装甲は…タワーじゃないだろうね…」

「ああ、たぶん。任務に行くつづつてた時は、バックラーだった」
会話が途切れる。ヘリのモーターの音、回転するプロペラの音が、機内を支配していた。

神機には、刀身、銃身、装甲と三つのパーツがある。そして、その各々がまた、サイズや性能により三種類に分けられる。
装甲の、タワーと分類される種類は、展開速度の遅さとガード時の身体への負担の大きさが目立つ代わりに防御範囲が広く、ダメージを通さない。想定される状況では、この装甲が最も望ましかった。

「…戦えないミズリを庇いながら…」

バックラーは、展開が早く負担が小さい代わりにガードをしてもある程度ダメージが通る。しかも基本的に防御範囲は狭く、二体を同時に相手にならまだしも、戦闘不能となったミズリを庇いながらの戦闘となれば、腕の立つ神機使いであれ厳しいだろう。

「ガード系のスキルがあっても…苦しいね…」

絶望的、と言っても過言ではない。

「…何で…神帝が現われたんでしょうか…？」

アリサがそう疑問の言葉を唱えた時、体に掛かるGの向きが変わった。

廃工場の、北東付近上空だった。

「降ろさなくていい。ここから行く」

アリサの疑問に答える間もなく、ソウヒは神機を片手にヘリの扉を開けると宙にその身を投げ出した。

ヒロキとアリサもそれに続く。

上空十何メートルかの、冷たい夜の闇を裂き、コンテナや鉄骨などが並ぶエリアに降り立ったソウヒ。オラクル細胞により強化された人体は、恐ろしい事にそこその高度から飛び降りても負傷することがない。

——どこだ？どこにいる？

ポケットから超視界錠を取り出し口に含む。

活性化された細胞が、神帝の居場所を突き止めた。

しかし、作戦エリアすべてを見通すチカラを一時的に得た彼の感覚が、別の敵の出現を報せる。

青銅色の人型で、美しい羽を纏う、その人間の女性の姿をした上半身と大きく広がった派手なスカートの様な下半身は、まるで大昔、中世の時代、欧州に栄えた貴族を思わせる。

「サリエルか…？」

しかしそれだけではなかった。

「ザイゴートまで!？」

背後からアリサの声。

工場の設備だった物の上に舞い降りた女神の両脇には、侍女の如く天使が控えている。

「通しては、くれないみたいだな」

「なら、無理を通すしかないね！ソウヒ！！」

地に降り立った青銅色の女神が、腕やスカートの羽を広げてソウヒらを威嚇する。だが、彼女らが動く事はなかった。両者の間で鳴り響いた爆音が、迸った激しい閃光が、彼女らの感覚を奪い取ったのだ。

スタングレネード。

旧時代から使われる手榴弾の一種だ。

「ナイススタン！」

そう言つてソウヒは、アラガミの背の側に、廃工場を南に走る。

「こっちは任せて！二人を！！」

ヒロキの叫ぶような声。

ソウヒは振り向かなかった。

背後で二度目の爆音と閃光が走る。スタングレネードの効果は、そう長くないのだ。

敵の数は多いが、極東支部第一部隊の誇る二人の新型神機使いには、そう苦になる程でもないだろう。

ゆえにソウヒは、安心してその場を後にする。

だが、全てが安心できるわけではもちろん、ない。

本当に安心できるのは、ミズリとナツメの二人を見つけてからだ。

「ミズリっ、ナツメっ」

夜の廃工場を走るソウヒ。

その彼が、込み上げる焦燥感をなんとか飲み込み、「間に合わないかもしれない」という諦めを振り払った時だった。

「——ッ!？」

アラガミの襲撃から奇跡的に生き残った植木の横を通り過ぎた辺りで、彼は殺気を感じた。

立ち止まり、左右を見渡すが何もいない。

ゆえに振り返った背後、太いパイプの様な物が三つ連なる上、工場施設の壁に開けられた大穴に、ソレはいた。

白い髭に、黒く、猛々しい冠、怒りの相を象る頭、強靱な四肢、黄金に輝くマント。極東支部の神機使いにとっては因縁の獣、「空」の意味を持つインド神話の古き天空神。神なる帝王——

「ディアウス…ピター…ッ」

ソウヒの表情に怒りが滲むのは、必然か。

「おおおおおおあああッ!！」

声の限りに叫んだそれは、まるで咆哮。神機使いもまた、神を喰らう獣であるかの様な。

呼応する様に、神帝もまた咆哮を轟かせる。

神帝は、地に降りた。

その頭に肉薄し、振り上げた紺碧の大鋸《野狐斬り》を、叩き込む。

そこから流れるように横向きの斬撃を刻み、

（この間合いなら！）

離れる。

予想した通り、神帝の爪が先程まで自分の居た場所を切り裂いた。
再度肉迫。

その顔面に幾度と斬撃を叩きつける。
走り、避け、叩き、防いだ。

（二人は！？）

神帝は単身だった。なら二人はどこにいる？そう思った時。

神帝の口元、荘厳な白髭の一部が、赤く染まっている様に見えた。
赤色の…。

だがそれも、繰り出される神帝の攻撃により判断する暇を与えられ
なかった。

（まさか…な…）

狙う部位を移そう。

二人の事はとりあえず後にしよう。

ソウヒはそう思った。

もしかすると、それは彼の逃避だったのかもしれない。

「ゲワアアアア！」

神帝のマントが電気を帯び始め、口からは荒く白い息を吐き出している。
怒りによって活性化している事は、一目瞭然だ。

「チッ」

ソウヒは小さく舌打ちした。

相手の体が硬質化している今、無闇に攻撃するしてスタミナを消費するのは得策ではない。

しかし、一度距離をとろうとしたソウヒに、神帝の爪が襲い掛かる。

「うぐっ！」

雷撃を纏い広くを攻撃するその爪に対して、ソウヒは瞬時に装甲を展開した。

しかしそれでも怒れる神帝の拳である。タワーシールドの性能でダメージはないが、余り有る威力は少年の体を吹き飛ばし、捕喰跡の窪みに溜まった汚水溜りに少年の体を叩きつけた。

派手にあがった水飛沫が、その拳の威力を物語っている。

痛みを訴えようと開いた口腔内に水が侵入し、ソウヒは溺れそうになるも、辛うじて繋ぎ止めた意識で水面に浮かび上がった。

「がはつかはっ…かはっ」

水溜まりの反対側では、神帝がこちらを見下ろしている。

「ゴホッ…くそッ、んなトコで、負けられつかよ…」

最後に大きく咳をして水を吐き出し、神帝を睨み返したまま、ソウヒは水溜まりから上がる。

休む間もなく青く輝くドームに辺りを包まれた。

（雷槌か…息ぐらい整えさせろって…ッ！）

疲れの溜り始めた体を酷使して、ステップを踏み青いドームから脱出しようとした突如、利き足である左足を何かが貫き、痺れる様な痛みが少年を襲った。

ステップを踏み損うソウヒ。

咄嗟に、腕をついて転倒を防ごうと体を捻ったが、彼の意識はどうしてかぼやけ、腕をも付き損なう。

苔の生えたコンクリートに頬が押しつけられ、その冷たさを感じた。場所は今だに雷槌の内側。視界には、密度を次第にあげていく青い光壁が映る。彼の脳は精一杯危険を叫んでいた。でも体は言う事を聞かない。

意識がはつきりしない。

(なんだ…コレ…)

雷槌の密度が頂点に達し、そのエネルギーを解放した。

「ア————ッッッ！！！！」

声は出なかった。

痛みを通り越した痛みに体が、身体中の感覚が吹っ飛ぶ。

ブチッ、ブチッと皮膚が弾けて、顔から手から、体の至る所から血が吹きだした。

普通なら大した事もないのだが、弱り切った体では耐えられず、それに何故かもう殆ど意識は残っていない。左足を貫いた何かの影響だろうか。ソウヒは鈍る思考を巡らせる。

もう殆ど残っていない感覚が、重い足音の近づくのを感じた。

感じただけ。最早理解もできない事象。

ピタリ、と足音が止んでも、分からない。

ドスッ、と、地面に倒れ伏していた創扉は神帝の前肢に軽がると蹴り飛ばされる。

ゴッ――。

鈍い音が響いた。数メートル宙を飛んで、コンクリートの高台の手前で止まった。

骨の二、三本は間違いなく逝っているだろうが、恐ろしい事に何も感じない。

傍から見れば人形の様だ。

痛みも感じないし叫びもしない。

何かに足掻こうともしない。

半開きの目は光を宿していないし、僅かに開いた口からは僅かな呼吸音がしているだけ。

じつと動かずなされるがままになっている。

辛うじて残っている呼吸により僅かに上下する肩が、少年の生をなんとか感じさせた。

「……ミズリ…ナツメ…」

俯せに倒れる彼の口が、ほぼ無意識だろうが仲間の名を呟いた。しかしもちろんその声を聞く人はいない訳で。

神帝の頭がすぐそこまで迫っている。

倒れ伏す少年を喰らおうと、その口が大きく開かれた。

そして、

一筋の光が、真上から帝王を突き刺す。

工場として機能していた物の上から身を乗り出し、熱戦を放った主は不敵に笑んだ。

「魔女っ娘有希ちゃん改、ただ今参上」

と。

第3話―壊滅？

ソーマ・シックザールは、――無表情、若しくはしかめっ面に定評のある彼には珍しく――息を呑んだ。

平原での任務を終えた彼は、帰還の為のヘリが来るのを待っていた。しかし、彼の通信端末が突如として鳴り響き、廃工場での緊急事態を告げられた。

そして、やってきた迎えのヘリに乗り込み彼は、真っすぐ鉄塔の森へ急いだ。

しかし、

「…どう言う事だ」

廃工場は静まり返っていた。

錆付いた鉄骨や太いパイプの間を音を立てない様に歩き、辺りに神経を集中させる。

戦闘は終わったのだろうか？

なら何かしらの連絡があるはずだ。
なのに何も無い。

「…全滅したのか？」

気付けば不吉な事を呟いていた。だが、ベテランと言える実力の隊が、既存のアラガミに遅れをとる事などそうないだろう。

「…何が……ッ！！」

彼の視界に、動くものが映った。

咄嗟に積み上げられたコンテナの陰に隠れ、様子を伺う。

（クツ…まだいやがったか！）

しかし彼の予想は裏切られた。

「ソーマ？」

そこにいたのは、彼のよく知る人物、朝倉ヒロキとアリサ・アミエーラだった。

「…お前らが来てたのか…他はどうした？」

見慣れた顔ぶれの登場に、ソーマは内心で安堵する。二人の実力は、同じ隊に所属して何度も死線を潜り抜けて来たソーマにはよく分かる。

「いや…それが…」

ヒロキが少し気まずそうに視線を下げ、それに代わってアリサが口を開く。

「ココには、私とヒロキとソウヒの三人で来たんです。でも、到着とほぼ同時にサリエルとザイゴートの群れが現われて…」

アリサとヒロキがソウヒを逃がした後、二人は、少し時間をかけてしまったが特に苦戦する事なくサリエルとザイゴート二体を倒した。しかし、ソウヒの後を追おうとした彼らに、再び、どこから湧いたのかザイゴートの群れが、しかも今度は墮天種まで交えて現われたのだ。

「かなりの数で、思っていたよりも時間をかけてしまったんです…」

「そんなに居たのか？」

「三十を過ぎてからは数えるのを止めたよ」
ソーマの質問にヒロキが苦笑いで答える。

「…二手に別れよう。僕は――」

「俺は一人でこっちから回る」

二、三度何かを払う様に頭を振り、隊長の顔になったヒロキが指示を出そうとするも、ソーマがそれを遮る。

「この様子じゃ戦闘は終わってる…。何か見つけた場合は信号弾だ。俺はもう行く」

お前らは少しくらい休んでからにしろ、とソーマは早々に歩きだした。

――

「？」

南回りのルートを選んだソーマは、廃工場の南側にある水溜まりの

傍で、ふと立ち止まった。

明らかにアラガミと神機使いが争った跡があったのだ。

確信。この近くに誰かがいるかもしれない。そう思ったソーマの、並みの神機使い以上に優れた感覚が、何かを捉えた。それは、四角く積み上げられた大きなコンテナの方。

「誰かいるのか!？」

ソーマは急いで駆け寄る。

「——ア——あ」

声が聞こえた。高い声。

「ヒッ——!」

短い叫び声は、コンテナ同士の間を開いた、一人がなんとか入るだろう程度の隙間から聞こえた。ソーマがそちらに目を向けると、

「イヤ…イヤッ!」

薄暗い隙間の奥に、一人の少女が涙を流しながら怯えた表情でこちらを見ていた。

「おま——」

「いやあああああ!」

そこにいたのは、六灯ミズリ。しかし声をかけようとしたものの、少女は混乱しているのかかなり取り乱していた。

「お、おい！しっかりしろ！」

慌てたソーマが隙間を覗き込み手を差し伸べるも、隙間で怯える少女は叫ぶばかりで話ができそうな状況になかった。

「クソッ……」

仕方なく隙間から離れ、彼は信号弾を打ち上げた。

「……何があつた？」

辺りを見回し、独り言を呟くソーマ。

怯え取り乱す少女に話し掛ける事が無駄と判断した彼は、ヒロキとアリサが来るまでの間を辺りの探索に使う事にした。

「……これは……」

新たな発見は、直ぐ見つかった。

水溜まりの向こう、パイプや鉄骨が頭上を覆うエリアの入り口に、比較的新しい焼け焦げた跡を見つけた。

「ソーマ！」

名を呼ばれ、視線を上げる。ヒロキとアリサが駆けてきていた。

「コレが、向こうで神帝ディアウス・ピターの死体の腹から見つけたよ……」

ソーマの傍で立ち止まったヒロキの手には、彼の物ではない、壊れた神機。

「こちらも…」

そして、アリサが差し出したのは、黒ずんだ腕輪。

「ナツメさんのだと、思います…」

三人の中で、一つの答えが導きだされる。

「喰われたか…」

「うん…」

だが、新たな疑問が浮かび上がる。

「ソウヒは見ませんでしたか？」

「いや。だが…」

あつちに、とソーマはミズリが隠れていたコンテナを指差す。

「ミズリが!？」

真っ先に駆け出したのはアリサだった。

彼らが話をしていた場所からそれほど距離がある訳ではないコンテナに向かって、アリサが走り寄り、ヒロキが続く。

「ミズリッ!?ミズリッ!!」

アリサが懸命に呼び掛けている。しかし、彼女の必死な態度が変わ

らない所を見ると、どうやら無駄らしい。

「発作か…」

ヒロキが苦々し気に呟いた。

「ソウヒは…M I A（作戦行動中行方不明）って事になるのかな…」

「…だろうな」

謎を残したまま、事件は収束に向かうだろう。

ソーマはそう考えていた。死別なんて、この職場ではよくあることだ。

ヒロキは自分にそう言い聞かせた。

何でこうなってしまったの？

アリサは誰になく問う。

迎えのヘリのプロペラの音が、少しずつ近くなってきていた。

無題―とある通信

あ、もしもし？ええ。お久しぶりです教官。…あはは、生きてましたよ。…ええ、聞いてます。やっぱりそうなるんだろと予想もしていました。僕、言ったんですけどね？そろそろ危ないからって…
…はい。はい、はい。…あ、わかります？さすが教官、察しがいいえ？あ、そうですね、失礼しました。で、その本題です。ええ。関わって…いなくはないですが…、え？はい。……………条件がありません。この事は他言しないで。支部の人間は決して一枚岩じゃない。ええ。守って頂けるなら。はい。彼ならこちらで保護しています。まだですね…もう二日です。そろそろ危ないです。もちろん異常です。分かっていますよ。ですが、今教官にお話する訳にはいかないんです。確かに僕は知っています。しかし確実ではない。それに、事を大きくする訳にもいかない。俺の実力は貴女も知っている筈だ。ええ。ただの新型じゃあないですよ。ええ、では。あ、そうだ。事が落ち着いたらそちらに伺わせて頂きますよ。ええ、支部長もお亡くなりになられたのでしょうか？怖いものなんて…あ、怒った教官は怖いですよってああごめんなさい！軽いジョークですよ！はい、はい、ええ、教官も体には気を付けて。では。失礼します。

第4話―別働隊

目が、覚めた。

「……ん……」

意識はあまりはつきりしていない。
どこだろう？

自分がいるのは病室の様な白い部屋の様だが、部屋の窓から射し込み部屋を朱く染め上げている夕陽が、ここがアナグラの医務室でない事を物語っている。

ふと、右手を顔の前にかかげた。

腕はついている。

腕輪もちゃんと。

服が入院服に替えられていた。

誰が着替えさせたのかは…知人がいるかも怪しいが考えないでおく。

「……っ……」

体を起こすすると、左足に軽い痛みが走った。入院服のズボンの左の裾を捲りあげると、左足、足首辺りに七、八センチほど包帯が巻いてあるのが目に入る。

「……えっと……」

何でこうなっているんだろう？

記憶を辿っても、同じ部隊のナツメとミズリの救援に向かって…と
いうところまでしか思い出せない。

—— 救援……

「——っ！ナツメと……ミズリは……！？」

あの二人は、どうなったのだろう。

次から次へと際限なく浮上してくる疑問。

「……俺は……」

助けられなかったのだろうか？同じ部隊の仲間を。

ガチャリ——

聞き慣れない、押し引きするタイプのドアが開かれる音がした。

「目が覚めたんですね」

澄んだ落ち着いた声が、鼓膜を刺激した。

見知らぬ一人の女性が部屋へと入ってくる。

歳は自分と同じか、一つ下くらいか。

肩の辺りで切り揃えられた淡い栗色の髪に、深い色の瞳。

どこかの学校のモノらしい紺のブレザー型の制服の内側にはタートルネックを着て、やはり制服であろう青と緑のチェック柄のフレアスカートを穿いている。

形の整った綺麗な顔は、明るく優しい微笑みを浮かべていた。

「よかったあ！運び込まれてもう三日も経つんですよ？」

体の前で合わされた手の、細く白い指の先を下唇にあてながら微笑む彼女は、心の底から嬉しいと言っている様で。

「ありがとう。ご心配、おかけしました」

自分も少し嬉しくなり、表情が少し緩んだ。

が、自分の置かれている状況が把握できていない状態ではあまり笑ってもいけない。

「……あ、あの…僕は、どうなったんでしょうか？その…」

ストレートに聞くのは何か悪いとは思っていたが、そんな直球な言葉しか思いつかなかった。

「あ…えつと…あ、ここは」

躊躇いか、迷いか。そんな表情をした彼女だが、すぐに元の優しげな笑顔に戻った。

「フェンリル極と——」

しかし、彼女の声を遮り、ドアが無駄に大きな音をたてて開け放たれた。

「悩める少年、君に教えてあげよう！ここは、フェンリル極東支部極東中部特殊別働隊拠点>ベースくだ！！」

なぜ中央なのかと言うと、このベースは旧日本地区中部地方を中心に活動しているからだ！

と、黒のロングコートを身に纏い、緩くカールした鈍い灰色の髪と、髪と同じ色の瞳を持つ男か女か判断しかねる人物が、半ばふざけたような台詞とともに登場した。

「そして、俺は片桐有希。^{カタギリ アキ} ここの責任者だ。覚えてな？ 荒堵ソウヒ君」

右手の親指で自分を指し、かつこよく決めている。その手首には、赤色の腕輪がはまっていた。神機使いらしい。

俺を指して、「荒堵ソウヒ」と呼んだところを見ると、どうやら自分の名前は向こうには知れているらしい。同じフェンリルの組織内だからだろうか？ だが聞いた事のない部署である。

しかしまあ、よくは分かった訳ではないがこれで一つ疑問は解消された。と言っても、一つが全てではもちろんなく、疑問はまだ残っている。

救援に向かったハズの自分が、一人ココにいるのか？ 二人は、それにヒロキやアリサはどうなったのか？ そして、

「（ごめん、あの子、男の子？）」

今から自分と話をする事になるだろう目の前の人物の性別が、判断できなかった。いくら一人称が「俺」と言えど、常識なんて当の昔に絶滅してしまったこのご時世。

だが、本人に聞くのは失礼と思い、寝台の隣に立っていた栗色の髪の少女に尋ねた。

「（はい。あんな容姿でも一応男ですよ。あ、でも凄い！ 初見であの人を男と言ったのは、私を知る限りではあなたが初めてです！）」

少女は、驚いていた。

そしてどうやら、あの隊長さんはずいぶんと苦労しているらしい。

「聞こえてるぞー… つかアイラちゃん、自己紹介してなかったの？」

ジトツとした目線をこちらに向ける少年。

「片桐さんが乱入してくるからできなかったんです」

しかし、アイラと呼ばれた少女に逆にジト目を向けられ、視線を逸らして空笑う。

「はあ……。申し遅れました。わたしは落野^{フキノ}アイラです。まだ適合候補者の身ですが、こちらでは医療関係を任されています」

一度ため息をついた彼女は、また柔らかな笑顔に戻る。

「おー、目え覚めたんだなあ」

「……………」

彼女の自己紹介が終わると同時に、新たな声がドアの方から響いた。

「ああ来たか。いいタイミングだな」

そこには一組の男女。

「紹介しよう、まずは男の方」

ボサボサのグレーの髪をした、背の低い少年を親指で指しながら、片桐という少年が話します。

「アイツは錦川ヒイラギ。神機は旧型遠距離だ」

上は袖がないタイプのフェンリルの制服を着用し、居住区で流行っているポップブランドの、ラフなボトムスを穿いた少年。第一部隊の藤木コウタの様な印象を受けるが、その目元だけはコウタにはない鋭さを持っている。

「で、あっちの女の方が、^{アカミヤ}朱宮ソラ。旧型近接の中では、歴代トップクラスの俊敏性を持っている」

続いて、片桐は隣の背の高く鋭い目の少女を紹介した。男性用の制服のジャケットの上着を羽織り、中のシャツは閉じずに両裾を結びあわせている。下も男性用の制服を着用しており、極東支部の女性陣に負けない露出の高さだ。腰上まで伸びている長い黒の髪が、彼女をより一層妖しく映している。

「主要人物はこんなもんかな…神機使いは後二人いるけど、今は出撃中だったか？」

この場にいる全員を見渡して、片桐が話を続ける。

「ああ。それと、あのオッサンか…まああの人は忙しいだろうからいいや…それで…」

今度は斜め上を見上げながらぶつぶつと呟き始めた片桐。だがふつとこちらに向き直り、

「ちょっとした大人の事情で、君も今日からココで働いてもらう！」と宣言した。

連絡の必要な所にはちゃんと連絡してある、と付け加えて。そしてくるりと踵を返し、扉を出て行こうとするモノだから、

「お、おい、意味分かんねえよ！もう少しくらい説明してくれないと状況の整理が出来な――」

だが、その訴えは半ばで打ち消される。

「大人の事情があると言った。仮にも君より一つ歳上で上司にあたる。その辺はちゃんと考えてくれ」

今までのヘラヘラとしたような態度口調とは変わって、真面目な、というか異様な位に冷めた、そんな口調での返答だった。冷酷もとれたかもしれない。

「ま、今は黙って仕事してくれ。何れ、ちゃんと話せる。未だ始まったばかりなんぞな」

穏やかな口調で意味深な台詞を残し、今度こそ彼は部屋から立ち去った。

第5話―藍憐

結局、分らない事だらけだった。

「……」

自分用にあてがわれた部屋のベッドに寝転がり、宙を見つめる。

片桐が去った後、治療着から配給の制服へと着替え、残っていた三人にベースと呼ばれるこの別働隊の拠点内を案内された。

拠点は、基本的にはアナグラを小さくしたような形状でアーコロジ―として成り立っているが、外周の対アラガミ装甲壁はアナグラ程でもなく、大規模な居住区があるワケでもなかった。

また、部隊をまとめているのが十七歳の少年である所為か組織の間は殆ど未成年者ばかりだった。未成年でなかったのは、整備士兼唯一の技術部担当者である憑寺典狼ツキシ テンロウという名の二十六歳の男だけ。

他は、面白い位に十八から十五の少年少女ばかり。

案内をしてくれた錦川曰く、『憑寺のおっさんは保護者みたいなもの』らしい。

（……にしてはずいぶんと可哀相な扱いされてた様な…）

保護者、と言う割りに年上の威厳の様なモノがなく、呼ばれ方がまず『おっさん』と言う時点でなかなか悲しい。

十代の若者の集まるコミュニティでは確かに彼は歳上だ。それにどこか老けた様な雰囲気があるしその背からは哀愁が滲みでていたが、実年齢はまだ三十路も超えていない。

『今、よろしいですか？』

ノックの音に続いた女性の声に、とりあえず上体を起こし、顔をドアに向ける。

「えっと、落野さん？何かありましたか？」

扉を開け入ってきたのは、栗色の髪の少女だった。

さっきまで着ていた紺色のブレザーは脱いできたらしく、クリーム色の長袖のタートルネックと、膝上丈のフレアスカートに身を包んでいた。

「水道の方、ちょっと様子見に来ました」

そう言つて、部屋に併設されているシャワー室の方に向かう彼女。彼女曰く、この部屋はベースが建てられてから誰も使っていないらしい。

そんな彼女の後ろ姿を、無意識の内に見つめていた。先程まではしっかりした生地ブレザーを着ていたため分からなかったが、彼女はずいぶんバランスのよい体型をしていた。柔らかな生地できているタートルネック越しに、彼女の女性らしいボディラインがしっかりと見てとれる。

「…どうかされました？」

いつの間にか、振り返っていた少女。

「え？いや…あ、すみません。そういえばさっき制服着てたよなと思つて…」

出会つて半日も経っていない女性に、「貴女の綺麗なボディライン

に見とれていました」などと言って口説ける程の度量は自分にはない。

「アレは学校ですよ。去年まで通っていたんです」

ココに来るのに中退しちゃったんですね、と彼女は懐かしむ様に言って、シャワー室の引き戸を開く。

（つてか任せっぱなしは悪いよな）

話を逸らせた事に安堵しつつ、自分もシャワー室へ。

いつまでなのかは分からないが部屋を使う身である以上、そういった元栓的な物の位置は把握しておいて損はないだろうし。

「何か手伝いましょうか？」

扉のトコロから覗き込み、中にいる少女に声をかける。

「あ、はい。大丈夫ですよ」

振り返った彼女は、シャワーの水温の調節ができるかを確かめていた。

「うん、温かくなるから…。ソウヒさん、温度調節はココを捻ったができますからね」

シャワーの傍にある二つの蛇口の片方を指したあと、彼女はシャワーの水を止めた。

「そしたら他には……きゃっ!？」

足元不注意、と言すべきか、シャワー室の入り口付近のふとした段差に躓いた。運がいいのか悪いのか、その正面には俺がいて、

「え？わっ！？」

見事に巻き添えをくらい、不意を打たれた俺は大きな音を立てて背中から床に激突した。

彼女が直接床に激突しなかった分だけマシかと思ったが、思わず閉じてしまった目を開けば、わずか十数センチの位置に彼女の可愛らしい顔があつて、彼女の柔らかい匂いがくすぐりたいと同時に心拍数が跳ね上がる。

しかも、俺の顔の横に両手をついて、彼女は俺に馬乗りになっている。

「おい、なんかスゲエ音したけど大丈夫かあ？」

…運は悪かったらしい。偶然廊下を通りかかったのか、グレーの髪の毛の少年が部屋の入り口から顔を覗かせた。

「……」

空気が固まったのが、目に見えてわかった。

誰も言葉を発しようとしなかった。

そりゃまあふと開いた扉の奥で、少女が少年を押し倒した様な構図ができあがってしまったっていれば、どうしようもなくなるだろう。

「えつとさ……その……個人的には、順序を大切にするのもいいと思うんだけど……」

気不味さ百パーセントで目線を泳がせる少年。

「…じゃな？その…悪かった」

その後彼の目線がこちらに向く事はなく、ゆっくりと扉は閉まり、少年の姿は見えなくなつた。

「「……ええーっ！！？？」」

状況を理解した二人の絶叫が重なる。『あんな光景を見られたのだから、そんな勘違いをされてもおかしくない』なんて考えられる程冷静でいらなかった二人は、

「ちょ、ちよつと！ヒイラギくん！？」

「おい！誤解だ！！」

その誤解を解くために、灰色の髪の少年を追いつけるハメになつたのだつた。

第5話―藍憐（後書き）

人物

朱宮ソラ（16）

2066年フェンリル極東支部入隊。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。

歳は若いが実戦経験は豊富で、神機との相性も良い。瞬発力・判断力共に優れ、多少の乱戦もソツなくこなす。錦川ヒイラギとの相性が良い。

神機：ショートブレード（旧型近接式）

片桐アキ（17）

2063年フェンリル本部入隊。

2064年フェンリル極東支部転属。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。

詳細不明

神機：ロングブレード・アサルト（新型可変式）

築寺テンロウ（26）

2059年フェンリル極東支部入隊。

フェンリル極東支部中部特殊別働隊技術部主任。過去に神機使いだった経歴を持つ。独特の発想を持ち、その若さでペイラー・榊と並ぶと噂されてもおかしくない程の優秀な人物だが、別働隊に転属になったお陰で無名のままである。

落野アイラ（16）

2071年フェンリル極東支部入隊。

適合候補者。フェンリルの付属学校にて医療分野の知識を学びながら、極東支部の医療班の補佐をしていた。現在は学校を自主退学し中部特殊別働隊に移籍。

錦川ヒイラギ（16）

2067年フェンリル極東支部入隊。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。高い銃の制動力と優れた狙撃センスを持つ一方で、狙撃手の行動圏外である近距離での射撃戦もこなしてしまうオールラウンダー。朱宮ソラとのコンビネーションは他の神機使いと一線を画する。

神機：スナイパー（旧型遠距離式）

その他

フェンリル極東支部中部特殊別働隊

片桐アキの提案により発足された特殊チーム。アナグラにアラガミが集中するのを少しでも緩和させる為に創られた。

第6話―二人の旧型神機使い

「今日はよろしく頼むぜ、アナグラの新型さんよ」

翌日。時刻は昼前くらい。そんなに広くないエントランスに降りると錦川ヒイラギが両手を腰に当て、ニツ、と笑っていた。

「こちらこそ、足引つ張らない様に頑張らせてもらいますよ」

失礼の無いように返事を返す。

昨日、片桐有希が去り際に知らせていった話だが、俺は怪我の治療回復もそこそこに、任務に出されるらしい。『ただでさえ少ない数で回してんだから、のんびり療養してる暇はないんだよ』とは片桐の言葉。

「あ、別にタメってもらって構わねえよ。同い年だろ？ここには上下関係もないしな！」

にひひ、と笑うヒイラギ。

少し変わった、でも凄く楽しそうな笑い方をするんだなと思った。

「じゃあタメ使わせてもらうよ」

「そうしてくれ。堅いところちまで喋りにくいからな」

と、言ったところでヒイラギの視線が俺の背後に移る。

「よっす、ソラ」

「おおよ……………ふあ」

続いて振り向くと、昨日初めて見た時やヒイラギと共にベースを案内してくれた時のクールな印象からは想像もできない状態の、朱宮ソラがエレベーターから降りてきた所だった。

欠伸をする表情にやたらと幼げがあり、昨日の印象とのギャップが可愛い。

「だろうな、驚くと思ってた」

俺の驚きを察したのか、ヒイラギが笑った。

「ソラはすっげえ朝弱いんだよ」

そうか、なるほど…。いやしかし、朝が弱いって…だからって、可愛らしい…確かキツネと言った、今となってはもう見られない動物のぬいぐるみ（サイズ大）を抱いたまま降りてくるのはどうなんだろう？ってかキツネってまた…。しかもぬいぐるみ趣味があるのか？どれだけギャップがあるんだ…。

「キツネは、ソラが好きな動物なんだよ」

昔っからな、とヒイラギが目を細める。まるで成長した自分の子どもに幼い頃懐かしむ様な目だった。

「昔っからって、そんな長い付き合いなのか、お前ら？」

「ああ。幼なじみってヤツだな」

今まで喋っていて気付いた事だが、この、錦川ヒイラギという少年はよく笑う。しかも、いろんな笑い方をする。いたずらっ子の様な少し変わった笑いから、優しげに微笑むまで、プラスの方面に表情が豊かなだ。

「さて、まあ全員揃ったところで、今日のミッションの確認な！」

ヒイラギが、上着の胸ポケットからメモらしき紙切れを取り出す。

「ミッション名『立ち会い演説』。ベース付近に溜まってるアラガミを、一掃するミッションだ。確認されているのはシユウ二体とオウガテイルが多数…有希のヤツ、洒落た名前つけやがるぜ…」

そこまで言ってヒイラギは思案した風になる。

「んっと、シユウ二体は俺とソラが担当するよ。で、ソウヒは若干ブランクがあるからな。オウガテイルの相手してやってくれ。雑魚つつつても、今回はかなり数があるから、調度いいウォーミングアップにはなるだろうよ」

「了解」

「うう」

隣で頷いたソラの声には未だ眠気が含まれている。

この状態で大丈夫なのだろうか…

「…な…んだかなあ…」

なんで一気にこんな来るんだよ…と、独り言ちた。

現在位置は、だだっ広い平野に点々と残る廃墟と化したビルの一つの二階。目下には、白、白、白、黒を挟んで白、白、白…数える事約三十数体。

久々の出撃に幾らかの緊張と興奮を覚えていたが、その気持ちは目の前に広がるオウガテイルだらけの光景に一気に掻き消された。ココのヤツらは定期的に討伐とかしないのだろうかと思う。

ちなみに、同行者の二人とは少し前に別れたところだ。あれだけ眠そうだった空も神機を持つといきなり目が覚めたようだった。今はもう戦闘中だろう。

「雑魚がこんなにいると流石に萎えるよな…」

蒼天の下に広がる開けた土地に、夥しい数の雑魚。そんな事も呟きなくなる。

「肩慣らしには丁度いいのかもしれないけど…」

呟きつつも、オリジナルカラーの零式キャノンの銃口を、のうのと歩いているオウガテイルらに向けトリガーを引く。

オラクル細胞の爆発弾は、オウガテイルの一匹に吸い込まれ、周りの二体程も巻き込む爆発を起こした。群れが、一斉にこちらを見上げる。

群れの数体が、動いた。尻尾を振り、尾にある針を飛ばしてくる。

「やっぱうぜえ」

ほとんどは高低差により軌道が逸れた。しかし一つ二つは偶然だろうが直撃するコースに乗り、こちらに飛来する。交わすのも煩わしく、放射バレットで針を吹き飛ばすと、神機を変形。群れのど真ん中に、紺碧の鋸を叩きつけた。

「うおらっ！」

「ギしゃあアアアッ」

腕に反動が伝わる。

首から上を真つ二つに叩き割られたオウガテイルの悲鳴が響き渡る。その悲鳴に刺激され、辺り一帯のオウガテイルの動きが活性化した。

「うるせえっ！」

素早く銃形態に戻しバレットを装填。

正面と左右に展開する爆発弾に交換すると、再度神機のトリガーを引いた。

一瞬で目の前が炎に包まれる。

効果あり。

数体が地面に転がる。

「もう一発ッ！」

再度同じ弾丸を放つ。

爆煙越したが数体が動かなくなったのが分かった。

だが、敵は次から次へと湧いて出てくる。

というかこの数でもまだ増える可能性があるのだから先が思いやれるところではない。

「まあ、やるしかねえよ——」

もう一度、神機を剣形態へ。

仕方ないか…

受け入れてしまえば早い。どうせこうなってしまうているのだから。

「——なあっ!!」

大きく、盛大に振るわれた野狐斬りは、その刃で敵を捉え風ぎ払い砕いていく。

「うおらっ!!」

続いて、返す刀で怯み仰け反ったオウガテイルの側頭部を殴った。

「ギしゃあああ」

短い断末魔。

視界の端に倒れるその姿を確認し、目標を次へと移す。
流れる様な連撃。しかし一対数十の勢力比にステップやガードをする回数が増えてしまい、直ぐにスタミナが限界を迎えた。

いや、待てよおかしい。何でこんな早いんだ？

いくら暫らく動いていなかったとは言え、二、三日程度休んでも体

力に影響なんて出なかった様に思う。

そう言えば、目が覚めた時も左足が…

意識が思考に向き始めた。

「ぎしやあああああ」

しかし突如背後で上がったオウガテイルの悲鳴が、意識を呼び戻す。

「ボヤボヤすんなよ！」

赤色の貫通レーザーが自分の脇を掠め、そのまま辺りのオウガテイルを貫いていく。

「新人でもねえのにゴッドイーターがザコに喰われてちゃあ、世話ねえぜ？」

手を止め振り向けば、つい数分前に別行動になった錦川ヒイラギがいた。

先程の貫通レーザーは、どうやら彼の構える旧型スナイパーから放たれたモノらしい。

「手を止めない。死にたくないなら」

冷静な、というか感情のない声がすぐ傍で聞こえ、驚き振り向くとこっちでは朱宮ソラが旧型近接のショートブレードでオウガテイルの一体を貫いたところだった。

「さあて、俺らも加勢すつかな」

「そっちのノルマは？」

「終わってなけりや来ねえよ」

「やけに早くないか？」

「ミッションの危険度がそんな高くないからな」

確か三か四だ、と笑うヒイラギ。

しかし、笑いながらも放たれるレーザーは必ず敵の足周りに当たっている。

「にしても、いくら低難度でも病み上がりはこの数は厳しいか？」

「ああ、いつもならさっさと終わらせれるんだけどな。さすがに本調子が出せないらしい」

いつの間にか、辺りのオウガテイルは殆ど片付いていた。

ソラが中央で攪乱し、弱らせ、ヒイラギの撃ったレーザーが弱った数体をまとめて貫きトドメを刺す。

たぶん、今まで自分が見てきたゴッドイーターの中で一番息の合ったコンビだ。

「ミッション完了……」

「…終わったな」

最後の一匹にトドメを刺したソラが神機を下ろし、ヒイラギはスナイパーを地面に突き立てた。

「アンタらすげえよ」

その二人を後ろから見つめ、感心する。
本当に、心の底から彼らをすごいと思う。
しかしヒイラギは、

「まだまだこんなじゃねえぜ？」

と悪戯っぽくニヤリと笑う。

「…昔から、一緒」

澄み切った蒼天を見つめていた空も、首だけこちらを振り向き呟いた。だが、その表情が何処か悲しげなのは気のせいだろうか？

ま、余計な詮索はしないでおこつ…

彼らには彼らの過去があるのだろう。自分にも少しくらい何かはあったりするのだ。

「さて、とりあえず今日は帰ろうぜ。明日もまた、ソウヒのリハビリがてら任務受けとくから、さっさと帰って休もうぜ！」

そう柊が提案した時だった。

「ギュギヤアアアああ！！」

蒼天の下に響き渡る突如咆哮。
驚き振り向いたその先には…

「「「!!!?」」」

——第一種接触禁忌アラガミ《触れてはならぬモノ》——

——ゴッドイーターキラ《明日ヲ蝕ムモノ》——

——神触皇「スサノオ」が、ビルの廃墟の半程に開けられた穴から自分達を見下ろしていた。

第7話―スサノオへ神触皇

「スサノオっ!？」

アナグラにいた時に話は聞いた事があったが、目にするのは初めてだ。

お陰で心臓が異常なほどに早鐘を打っている。

「…ソウヒ、お前の腕輪は対第一種接触禁忌アラガミ措置はしてあるか？」

こちらを睨んだまま動かない神触皇を睨み返しながら、ヒイラギが口を開いた。

「な？対…禁忌…なんて？」

聞いた事のない言葉が神触皇スサノオの出現で動揺している脳を更に混乱させる。

「知らないなら離れてて。壊れるから。近いと偏食場パルスの影響を受けるから遠くに行くこと」

今度はソラ。

彼女もまた、神触皇を睨み付けている。

―へ、偏食場パルス??なんだよそれ!?

アナグラで第一種接触禁忌アラガミについての講義を聞いた時にはそんな言葉は聞かなかった様に思う。

だが、それよりも、

「アンタらは！？あんなの相手に――」

「アラガミ化した人間なんてもう見たくないの。早く行つて」

「……」

静かな口調。しかし、底知れない威圧感が込められている。
言葉を失った。

しかも、

「アラガミ化した人間を、“もう”見たくない……？」

「アラガミ化した人間なんてもう見たくない……早く行つて」
幼馴染みの少女がそう告げた時、全身に寒気が走った。
思わず、彼女を見つめる。

――ソラ……

「ギユアあああッ！！」

再び神触皇が咆哮を上げ、その四本の細い足で走り出す。時間はあ

まらない。

「とにかく、今は離れてる。質問コーナーはまたあとでだ！」

早口にまくし立て、スタングレネードをスサノオに投げ付けた。

「今だ！全力で走れ！！」

ソウヒが乾いた地面を蹴り走りだす音を確認しつつ、自分はスサノオに向かって走る。

動きを封じた今の内にできる限りダメージを与えたい。

「ソラっ！神機だ！！」

「任せて」

俺の声に呼応し駆け出したソラ。

一気に神触皇との距離を詰めると、彼女は神触皇の、神機の捕喰形態の様なその腕に短い刀身を突き立てた。

スサノオの神機は、神機使いにとって一番の恐怖となる。あの腕に喰われたゴッドイーターなど数知れない。

スサノオとは、コレが初めてではなかった。ベースに来てから何度か撃退している——討伐にならなかったのは、スサノオが出現するタイミングが決まって任務の後だったからだ。

ベースは規模が小さいから、任務の管理があまり正確でない。出現するアラガミの数が少ない代わりなのか、不意打ちにアラガミが出現するなんてよくある事なのだ。

「コイツは…ちょっとばかりデケえな

神経の回復したスサノオが、両腕の神機を合わせ体を捻った。
ソラは未だスサノオの神機に貼りついている。

―来るか？止まるか？

自分がいるのも尻尾の攻撃圏内。

スサノオは、ソラの斬撃に怯む事なくその体を大きくスピンさせた。
それをジャンプで交わす。

ソラも同じように、空中に逃げた。空中に逃げた彼女は、そこから
しつこく神機を刻み続けている。

ポロツ、とスサノオの神機の一部が僅かに欠けた。

もう壊せる。そう判断し、神機にレーザーを集中させる。

しかし、神機に与えられるレーザーのダメージは然程大きくない。

ソラに任せた方が早いと思う。が、ソラに任せれば、彼女は神機に
近づかなければならない。つまり、少しのミスで捕喰されかねない
位置なのだ。

いくら彼女が優れた神機使いだとは言っても、もしもの事が起こっ
てしまう事がひどく恐ろしい。

「ヒイラギ！」

ソラの悲鳴の様な声が鼓膜を刺激する。

目の前には、辺りを乱れ突く神触皇の剣が迫っていた。

反射的にバックステップを踏んで剣を交わす。が、

「んなっ――」

スサノオの攻撃は、剣撃だけでは終わらないのだ。

視界を白い光に覆われ、焼ける様な痛みの上に全身を衝撃が襲った
後、爆風に飛ばされた体は地面に打ち付けられ数メートル転がって

止まった。

「ヒイラギっ!？」

「来るな！」

やや離れたところから届く幼馴染みの悲鳴。そして近付く焦りの混じった足音。一撃の重さに定評のあるスサノオの攻撃を、殆どまともに食らったのだ。いくら神機使いになって強化されている体でも危ないモノは危ない。ソラが心配するのも当然と言えば当然か。でも、迂闊に近寄らせて神触皇に対する注意を薄くさせてはいけないと思い、出せる限りの声を出した。

「大丈夫だ…ちょっと考え事してただけだから」

体を起こすと、尾の先のコアを明滅させるスサノオがすぐ目の前で迫っていた。一瞬、その巨大な口が蔑むが如く吊り上がったかのように錯覚する。

「だがよ、俺も吹っ切れたぜ？」

殺気に満ちたスサノオの神機が赤く輝くのと、挑発的に向けたスナイパーの銃口にオラクルが満ちるのが同じタイミングだった。

第8話―本気

「ソラ！前足だ！！」

できるか分からないがダウンを狙えるなら狙いたい。

捕喰の連撃が繰り出されるまでの僅かな時間。

スサノオの口がほんの少し開いたのを見逃さず、口が閉じられる前にその隙間にすかさず銃口を捻り込んだ。

「爆ぜ散れッ！！」

銃口から溢れる神属性の熱線は、神触皇の内を貫いた。

「ギユアアアアッ」

苦痛にその身を仰け反らせるスサノオ。

もちろん神機をは口に捻じ込んだままで、そのまま宙に投げ出される。が、

「予想済みなんだよッ！」

空中で体を捻り態勢を整え、逆立ちをする格好に近い姿勢で再びトリガーを引き絞る。今度撃ち出したのは、屈折系で垂直に三本並んだレーザー。それは綺麗に神触皇の尾の先の、黒い輝きを放つ剣に吸い込まれた。

「はあっ！！」

その剣に、高く跳躍した空の神機の刃が、追い打ちをかける様に連撃を刻み込む。
形成逆転。

斬撃に弱い部位をいきなり攻撃されひるんだスサノオは、結合崩壊こそ起こしていないものの、動きに精彩を欠きはじめていた。

「いける!!」

後ろ足に張り付いている空を狙ってか、スサノオは尻尾を地面に叩きつける。それを好機と見て正面に回り込み口に神属性レーザーを連続で打ち込むと、着弾した口元に亀裂が走った。

「ぎゅああああ」

と、スサノオは苦痛を訴え再度仰け反るが、その行為が仇となる。何故なら、今スサノオの後ろ足は、空が集中的に攻撃していたのだ。全体重を、崩壊しかけの後ろ足で支える事となったスサノオの体が、無残に崩れ落ちた。

「このままっ!!」

「トドメをつ!!」

ダウンの隙に捕喰し、神機を解放して身体能力の上昇した空の声に呼応する様に、スタミナ活性化剤を飲み、Oアンプルのガラス筒を三本、指に挟んだ。

「当てるぜえ!!」

貫通するレーザー弾のバレットを装填し、トリガーを絞り撃てるだ

けの弾を撃つ。弾切れを起こせばガラス筒の栓を歯で引き抜きアンブルを流し込む。そして再び撃つ。

スサノオの全身に亀裂が走り、その割れ目からレーザーの光が溢れ出した。

だが、ダウン時間にも限りがある。一度は俯き生氣を失っていたスサノオの眼孔に光が戻り、尾のコアが激しく明滅しだした。

「ギユアアあああああ」

スサノオの咆哮が響き渡る。

「させるかよ！」

直後、咆哮を上回る爆音と激しい光が辺りを包んだ。怒り活性化するの虚しく、空の叩きつけたスタングレネードによりその体の自由を奪われフラつく神触皇。

「ナイス！ソラッ」

手に残っていた最後の一本のアンブルを飲み干し、再び貫通を浴びせる。

一方の空はスサノオの神機を斬り続け、崩すまでに至っていた。

「ギユアアああああアアッ」

スタン状態から覚めたスサノオがまた吠える。

両手に構える、辛うじて機能を残した神機が、妖しい光を放ち始めた。

あと少しで、その神機は自分と空を喰らおうと突き出される。

が、

傷つき弱り切った上、大きな負荷がかかったスサノオの体は至る所が崩壊する寸前で、重く鈍い音を立てながらその胴を地に落とした。

「仕留めるっ！」

空が、スサノオの顔の前に飛び上がり短剣を振りかざす。

最後の足掻きか、スサノオが両腕を空を挟み込む様に顔の前で合わせようとした。

しかし右腕は空に弾かれ、左腕は自分の撃った迎撃用の放射バレットに撃ち払われる。

足掻く手段すら失い、無惨に顔面を曝したスサノオと、右腕を弾いた勢いで水平に半回転強ほど回った空。次の一撃できつと勝負が決まるだろう瞬間。

そして空は空中で神機を解放し、神機から溢れ出した顎でスサノオの無防備な顔面に喰らい付いた。

ズンッ――

スサノオの体が音を立てて沈む。

完全に、動かなくなった。

空が、崩れたスサノオからひよいと離れる。彼女の神機が喰らい付いていた顔面部は、捕喰行為によって抉り取られ既に顔の形を残していなかった。

「お前って、時折えげつねえよな」

戦闘で上がった心搏を落ち着けつつ、彼女の隣に立ち苦笑する。スサノオの口に神機を捻り込み貫通レーザーを撃った自分は、もちろん

ん棚に上げて。

「ヒイラギは、時々酷い」

表情は変化していない様に見えるが、呟いた彼女の声は「人の事言えるの？」とどこか不機嫌で、唇を――彼女と長い付き合いのある自分にしか分らない程度で――尖らせていた。

自分にしか見せない、と言う点に僅かに優越感の様なそうでない様なモノを覚えるが、それは彼女と過ごした時間に直ぐに掻き消されてしまった。一緒に過ごしたあの頃は、本当に酷いモノだったから。

「喰つとかなくていいのか？」

「さつきそのまま食べた」

「何かレアあった？」

「外骨格と…神機…？」

「…レア？」

「知らない。反応がないから違うかも」

そう言えば、倒したのは初めてだったか。

「ま、さっさと帰って、築寺のおっさんに見せるか！」

振り返り、やや離れた所にあるビルの影から創扉がやや渋い顔で走ってくるのを見つける。

そういえば、創扉に色々説明しなきゃならないのか…

彼の表情から察するに、どうやら、質問攻めに合いそうだ。

大きく息を吐き出す。

まあ、おっさんに任せよう。

その為には早く帰らなければ。

第9話―幼馴染み

「なあ…さっきのソラの、『アラガミ化した人間なんてもう見たくない』って…」

二人と合流したソウヒ。

だが、合流してもしばらく彼は渋い表情で押し黙ったままだった。その彼が口を開いたのは、どこか気まずい沈黙が流れ始めた頃。

「……別に…そのままの意味だけど」

拳動不審に視線を移しつつそう返すのが、その話になるべく触れたくないヒイラギにできる精一杯だった。そして、一番それを思い出したくない彼の幼馴染みは、彼の隣で完全に俯いてしまっている。

「あ……そう」

諦めた様だが納得いかないと言いたげな顔をするソウヒ。再び訪れる沈黙。

その沈黙は、三人がベースへ帰投するまで続いた。

「お帰りなさい！あの、スサノオが出たって…」

保管エリアに神機を預け出撃ゲートを潜ると、ソラは早々に自室へ戻ってしまった。そして、交替するかのようなタイミングで、医療班の路野アイラが少し慌てた様子で駆け寄ってくる。

「怪我とか…は…大丈夫そうですね。あの、ソラさんは？」

突然の禁忌種の出現の連絡を受けて、三人に怪我等あった場合を心配していた彼女だった。しかし、目の前の二人に負傷は見られない。そこで一安心したらしい彼女。だが、共に任務に出ていたもう一人が居ない事に気付くと、心配そうに訊ねた。

「先に部屋に戻ったよ。大丈夫。あいつにも怪我とかはないから」

「でも、直ぐに部屋に戻ったって事はやっぱり――」

「流石、”千里眼”だね」

何かあったんじゃないんですかと同僚を心配するアイラの落ち着いた声を遮り、空気を読んでいない、冷やかし混じりのふざけた調子の声が、彼女の後ろから届く。

現れたのは、黒縁の眼鏡を掛けた白髪の男性だった。

「ああ、築寺センサーか…」

築寺テノウ。

ベースで整備士と技術研究をしている二十六歳の男で、優秀な研究者の父親を持っていた。過去形であるのは彼の父は早くに病死したから。若い頃からアナグラに出入りし、ペイラー榊に師事。非凡な才能を顕した。と言っても、その才能が明確に発揮され始めたのは最近になってから。正確には、片桐に引き抜かれてからだ。

「ヒイラギ君に先生と呼ばれるなんて、久しぶりだね」

どこか紳博士に似た喋り方をする築寺。

「俺も、”千里眼”って呼ばれんの久しぶりっすよ」

”千里眼”。千里の先をも撃ち貫くと言う意味で、ヒイラギが片桐に引き抜かれた頃につけられたあだ名だ。その頃のヒイラギは、アナグラで、最も高い狙撃精度の持ち主と言われていた。

「ああ…ココにはいないからね、君をそう呼んだ連中は…」

ひひ、と不審者っぽく怪しげに笑う築寺に、苦笑いするヒイラギ。

「…変な話しないでくださいよ…。狙撃以外は危なかったんですから……俺ももう部屋に戻るんで」

後は色々任せますよと片手を挙げると、彼もまた自室へと戻る。

「ゆっくり休むといいよ。後は僕がやっておこう。で、ソウヒ君。今から君に、色々と話があるから、僕に着いてきて。どうせあのヒイラギ君の事だ。アナグラで、大した禁忌一種の説明も受けていない君が、納得できる説明もしていないだろう？」

「え、あ…はい」

顔に貼りついてたニヤケを消し去ると、築寺は穏やかな声でソウヒを呼ぶ。

「結構時間かかるけど、まあ聞いて無駄な事は言わないから」

ソウヒに背を向け歩きだす憑寺。

「そうだ。アイラ君、コーヒー煎れてほしいんだけど、頼んでもいいかな？」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「後、君も聞いて行くといいよ。君は禁忌一種への対処法を聞いてないだろう？」

「はい。ありがとうございます」

エントランスを離れ、廊下を進む三人。着いたのは築寺のラボに組み込まれた応接室。

「じゃ、頼むね」

アイラが領いて、部屋の隅にある簡易的なキッチンへと向かった。部屋は応接室の割りにあまり片付いておらず、書類や資料、文献らしきものが至るところに放置されている。唯一片付いていたのは、中央にあった天板がガラスのテーブルと、テーブルを囲むように並べられた二人用ソファ一つ、一人用ソファ二つ。

憑寺はその一人用ソファの一つまで歩いて行くと、振り返りソウヒに手招きをする。

「まあ座つてよ」

既にソファに腰掛けている築寺に促され、ソウヒは二人用ソファの築寺寄りに座った。

怪しい微笑みを浮かべる築寺。どこか人の中身を見透かした様な笑

みに、ソウヒは背筋に少し寒気が走るのを感じた。

「さて……どの話が聞きたい？」

簡易キッチンから戻ったアイラが、テーブルにコーヒーを置く。

香ばしい薫りに鼻孔をくすぐられ、ソウヒは少し落ち着いた気分になった。その彼の隣に、築寺に「座るといいよ」と言われたアイラが「失礼します」と腰掛ける。

その一連の動作が終わり、一呼吸を置いて、ソウヒは一番の疑問をゆっくりとした口調で尋ねる。

「……………あの二人は…昔、何があっただんですか？」

ボタン。

背後で、音を立てて、今となっては珍しい手動で開閉するドアが閉じる。

——お前は、ずっと、俺が守る。

ドアが閉じるなりその扉に持たれ掛かり、そのままずり落ちた。扉と床の、無機質な冷たさが接している箇所から伝わってくる。あの時、自分がソラに言った台詞が蘇ってきた。誰かを守るなんて、今の自分にできるのだろうか？

——「こんな自分に…」

負に進んだ思考を止めるため、額に掌を打ち付ける。
自分にとって、過去に触れられる事は初めてではなかった。それは、
今までずっと一緒だったソラも同じで、人と関わる仕事上、仲間と
の日常会話の中で自分の生い立ちを話す機会だっただけであつた。

——「機会」だけ…だったけどな。

どこか自嘲的な笑みが浮かぶ。

自分もソラも、その手の話は大概、「特に何にも無かった」と済ま
せてきている。ほんの僅かな例外を除いて、誰にも本当を話してい
ない。

嘘で偽り、決して話そうとは思わなかった。早い話、逃げてきたと
言うこと。自分達の過去から。向き合おうとは思っていなかった。
向き合つて、どうにかなると思わなかったから。
今日に限って、自棄に床が冷たい。

——全部失つて、それでも立ち上がろうなんて…

思える気がしなかった。

床の温度は、そう思う自分を拒む様な、そんな冷たさだった。

「ソウヒ君は、コーヒーにはミルク入れる派？」

アイラの煎れたコーヒーを啜り、一息間を置いて、築寺が最初に口にした言葉に、ソウヒは怪訝な表情をした。

「……あの……」

ソウヒの口から、あからさまに不機嫌な声が漏れる。

「端的に言おう。朱宮ソラと錦川ヒイラギは、彼ら自身の目の前で親を殺された。正確に言えば、朱宮君は母親、錦川君は両親だ」

「……え……」

いきなり、しかも単刀直入な発言にソウヒは驚きを隠せない。

「……あの……」殺された”って……アラガミにですか？」

隣から、アイラが遠慮がちに尋ねる。彼女にとってもこの話は初めてだったらしい。

「……アラガミ……ねえ……」

息を深く吸い込んだ築寺が、ソファに深く持たれ掛かり、天井を仰ぐ。

「それは君たちの価値観次第だろう」

「は？」

「え？」

ソウヒとアイラの、その言葉を理解できないと言っ反応が、同時に起こった。

天井から二人に視線を戻しその反応を見た築寺は、やや猫背気味な姿勢になる。眼鏡の奥の目は、レンズに反射した光に隠されていた。

「君たちは――」

――アラガミ化した親を、人間と言えるかい？

無題―あの日

「ソラあゝ、そゝらあゝ！」

日の沈みかけた外部居住区を、六歳の少年が歩く。黒っぽい髪はボサボサだが、若干の吊り目と眼力の強さは彼の外見年齢を僅かに上げていた。

「あゝあゝ暗くなってきたなあゝ」

辺りは夕方のオレンジ色に夜の紫色が混ざり始めていて、幼き日の柊の心に不安が生まれる。

別に、幼馴染みがどうと言う訳ではなかったし、闇が恐ろしかった訳ではなかった。

ただ、さつきから誰も外に居ないのだ。

普段なら少しくらい人が出歩いている筈の、日没間際の外部居住区なのに、誰一人として姿を見ていない。まるで、町が死んでいるかの様に静まりかえっている。

「どこにいったよ……そおゝらあゝ！」

だから、嫌な予感がしていたのも言うまでもない。

こんな状況になるのは、大抵アラガミが原因と決まっているからだ。不安は、だんだんと膨らみ上がり彼の心を押し潰そうとする。

「おい！…ソラあ！！」

その不安から逃れる様に一際大きく叫んだ時、細い路地から幼馴染みが、肩にもかからない黒いショートヘアを揺らしながらひよっ

こりと姿を現す。

「ひい…ら…ぎっ。」

どうかしたの？と言う様に、しかし無表情に首を傾げる空。

「あのなあ…ソラがいなくなったから、探しに来たんだよ」

はあ、と溜め息を吐き額を押さえる柊。

自分の幾らかの苦労はなんだったんだろう？と、彼は腹の底でボヤいた。

そして同時に、彼女の無表情にも少しがっかりしていた。

去年父親が”居なくなつて”以来、空は泣いたり怒ったり笑つたりと、感情を表す事がない。

彼女と生まれた時から殆ど一緒に過ごしている柊には、それが辛くて堪らなかった。早く前みたいに笑って欲しいなど、彼は願っている。

「とにかく、帰るぞ。もう暗くなるし、それに誰もいないし」

「あ…待つて」

柊が空の手を掴んで歩きだそうとすると、彼女がそれを拒んだ。

「ん？なんか…あつたの？」

拒まれた事に少し怪訝な表情をしつつ柊が振り返ると、空は少し焦った様な、しかしどこか嬉しそうな素振りを見せる。

「なんとなく…だけど、お父さんが…」

「…？ソラの父さんが、居るのか！？」

知らない人が聞けば、正直よく分からない会話である。

簡単に言えば、空の父親は現在行方不明の状況だ。別に、彼女の父は神機使いと言う訳ではない。外部居住区で暮らす一般人であったが、一年前の、外部居住区へのアラガミの侵入の時に行方不明となった。

周りの者は、皆揃って諦めを口にする。「もう死んでしまってるだろう」と。

しかし、空は諦めていなかった。根拠も何もなかったと思う。が、彼女は父親の生を信じ続けていた。だから、柊も信じ続けた。父親が消えたあの日以来、心を消した少女の、その希望を守るため。

「だから…探したい…」

「そっか」

目先の幸福に、目が眩んだ。空の目に、心が強く顕れているのを見て、彼女しか見えなくなる。他なんてどうでもいいや、と。

「なら、探そうぜ！きつと見つかる！」

だから、自分が選んだ言葉は、彼女を苦しめてしまう結末を導いた。「父さんならきつと家に帰ってくるよ。だから、俺達も帰ろう」本当はそう言っべきだったと、少年が気付くのはソレから何年も先。そして、その時は直ぐに訪れる。

「…！？お父さん！？…お父さん！！」

薄暗い路地に、入り口にいる自分達に背を向けて男が立っていた。その後ろ姿を見つけた空は駆け出し、先程にも増して嬉しそうな声を出す。

——あれ…？おかしい？

だが自分も知っている彼女の父親の背中に、違和感を覚える。彼女の父親の皮膚は、あんなに白かっただろうか？髪の色も、陽光を反射する様な明るいグレーではなく、光を吸い込む様な黒だった筈だ。

そこまで気付いた時、柊はとっさに走りだしていた。前を走る空に向かって。

「ソラああああ！！」

幸いだったのはソラが本気で走っていなかったのと、あの父親らしいソレとの距離が開いていた事か。

空に追い付いた柊は、彼女を抱き抱えたまま倒れこもつとする。顔の横を、空の父親だったであろうソレの腕が掠め、冷や汗が吹き出した。あとわずかでも顔の位置がズレていれば、自分の首から上はきれいにあの腕の中だった事だろう。

「つつー！！」

「きゃっ」

地面に倒れ、柊は呻く。同時に聞こえた空の小さな悲鳴。

「だ………」

喋り出そうとすると同時に目を開いた柊は愕然とした。空を心配した彼の声は、その思いを伝える事なく途切れる。目を見開いた柊。

その視界には、倒れる自分達を見下ろす空の父親が映っていた。

アラガミ

第10話―あなたの存在、君の居場所

「要点から話そう。と言っても僕から話せるのは、事件の調査報告程度の物だけだね。まず――」

眼鏡を押し上げ、築寺は小さくため息を吐く。

「――十一年前、まだ神機使いの配属数も少なかった頃、外部居住区にアラガミが侵入した。大型は早急に討伐されたけど、人員の少なさに一体だけオウガテイルが討ち漏らされてしまった。その後、オウガテイルは討伐されたけれど…そのオウガテイルによって一般人に被害が出た……」

築寺は再び珈琲の残るカップを口に運ぶ。

「…その一般人が、ソラさんの…?」

やや遠慮がちに、アイラが口を挟んだ。

「…誰もが彼女の父親は死んだって思ってたね。けど…違った。彼女の父親は、一年後、戻って来たんだよ」

マグカップを持ったまま、築寺はソファから立ち上がる。

「…二人とも、腕輪を失った神機使いが、アラガミ化するメカニズムは知ってるよね?」

「…はい。腕輪は、体内のオラクル細胞を制御する役割を担ってい

るから――」

「そう。その制御装置を失ってしまえば、人体に入り込んでいるオラクル細胞は好き勝手にしまえる。なら、腕輪すらない一般人の体内に、オラクル細胞が入り込めば……」

ソウヒが答えようとした言葉に繋げながら、自らは壁際の書類棚へ向かう築寺。そこからファイルを二つ取り出すと、彼はソレをソファに座ったままの二人に向かって軽く放り投げた。

「『一般人の アラガミ化 について』……」

「こっちは、『外部居住区在住一般人のアラガミ化事件 報告書』……」

ファイルを受け取った二人はすぐにソレ目を移す。

「普通、一般人が片腕だけ喰われるなんてないからね。抵抗手段がないから一瞬で丸呑みにされるハズなんだ。……けどソラ君の父親は、生きていた。何をしたのかはわからないんだけどね」

書類棚にもたれ掛かり、築寺はまた大きく息を吐く。

「……事件から半年が過ぎた頃、外部居住区で一般人が殺害される事件が起こり始めた……」

棚にもたれ掛かったまま後ろ手に棚に手を伸ばし、築寺はさらに一つのファイルを手に取り再びソウヒに投げ渡した。

「『外部居住区における連続通り魔事件 報告書』……」

「悪質な犯罪として、フェンリルの警備部門が担当していたんだけどね、調べる内に、人の仕業ではない事が分かり始めた」

書類を捲って行く毎に現れる名前と顔写真。そんなページが三十枚程続くと、文章のみのページが現れた。

「尚、本件は外部居住区在住の民間人、^{アカミヤ}朱宮ケイ氏がアラガミ化したモノが原因とされる」……」

築寺は柵にもたれたまま。

「朱宮ケイ氏は、ソラ君の父親だよ……。対アラガミとされ、神機使いによる捜査が始まった時に、現れたんだ……。もちろんすぐに避難指示が出された。けれど、子ども二人がいつまで経っても集合場所に来ないって言う親が制止を振り切ってね」

築寺は一度俯くと、眼鏡をまた押し上げた。

「……僕らが追い付いた頃には、もう……ね」

彼の目は、やはり眼鏡が光を反射していて見る事ができなかった。

——赤い……なあ……

ベースは、アナグラと違って部屋の窓からは外が見えるので一日中電気を点けておく必要はなかった。時間に合わせて点けたり消したりするのだ。

——赤い…

部屋は、夕陽が直に射し込みオレンジ色の世界になっていた。

——寒い

そう感じた時、自分はまだドアにもたれていたんだと気付く。

——…あーあ、なんか、情けねえなあ…

最近、何か考え過ぎるコトが多くなってきている。今日みたいに、一人で塞ぎ込む様にして。

——ダメだな…こんなんじゃあ…

兎に角一度立ち上がり、部屋の明かりを点けようと思った所で、誰かが部屋の戸を叩いた。

誰が来たのかは何となく分かっていて。だから、返事をする事なく戸を開く。

案の定、廊下に立っていたのはソラだった。ちなみに、珍しい事に彼女は、普段なら着崩している男性用の制服を真面目に着ている。

「どうした？」

「ヒイラギ、泣いてないかなって」

高過ぎず低すぎない、澄み切った声が優しく響く。

優しい表情で微笑み少し首を傾げた——と言っても僅かにの域は脱しないが——彼女の珍しい表情に、内心で驚いていた。

「泣いてねえよ」

軽く笑いながら答える。が、実際泣いていないにしろ声のトーンは重くなってしまった。

自分の表情が暗くなっていくように感じ、ソラには「入れよ」と言いつつも悟られる前に顔を背け、部屋に戻る。

「でも、悩んでたね」

「…よく分かったな」

「ヒイラギの事だから」

ピタリ、と彼女の手のひらを背中に感じた。

「…なんとなく、判る」

体に腕が回され、彼女に抱き締められている事が分かった。彼女の方が背が高い為、同じ年の幼馴染みに抱き締められていると言うよりは、歳上の、大人の女性の腕の中の様な感じがしていた。

「無理は、しないで」

耳元で、澄んだアルトボイスが響く。

こんなに饒舌な彼女は久しぶりだ。

しかし、その原因は自分が悩んでいた事にあると思うと、素直に嬉しいとは思えない。

「守る、なんて昔の約束はいいから」

”昔”

その単語が彼女の口から聞けるとは思わなかった。

彼女があゝの約束を覚えていてくれた事は何か恥ずかしくもあるが、それ以前にあの事件を一番思い出したくないのは、自分ではなく彼女の筈だ。

「無理しないで。ヒイラギが居なくなったら、イヤ」

「…ソラ」

「居てくれるだけで、嬉しいから」

ソラの声は穏やかだった。

しかし、その穏やかな声より自分を抱き締める彼女の腕が小刻みに震えている事に気付いてしまう。

過去を払拭した訳ではなかった。彼女も弱いままだった。しかし、向き合おうとしていた。

「…お前だって、無理するなよ」

長く見ていなかった彼女の笑顔が見れたのに、聞いていなかった明るい声が聞けたのに、それが自分の失態の為と分かると喜ぶなんてできない。寧ろ、守るなんて偉そうな約束をしておいてこの様だ。

「ごめんな、ソラ…」

今さら謝って、何になるのだろうか？

そうする事しかできない自分が、酷く腹立たしい。

「うつん、わたしも、ヒイラギに無理させてた…」

なのに、彼女は自分に優しくして。俯けた顔を下げたままの自分に、こんなにも優しさをくれて。その優しさが、今の自分には受け容れられなかった。

許される温かさが、腕の中の彼女の温もりが、今は酷く辛いモノに感じられていた。

第11話―禁忌を破る為の力へソロモン・リング―

築寺は俯いたまま口を閉ざしてしまった。

仕方なしに手元の書類に目を落とすソウヒだったが、隣の少女が見せたあからさまな動揺に、ふと顔を上げる。

「ソウヒさん、これ…」

彼女が指し示していたのは、彼女が渡された『外部居住区在住一般人のアラガミ化事件報告書』の書類束の一枚。

「……ゴッドイーターが…三人も!？」

ソウヒは訝しむ様な声をあげ眉を寄せる。

討伐に参加した神機使いの名前が四人分。しかし、内三人の名前の後ろには「K I A（戦死）」と書かれており、唯一生存したらしい一人は、

「除隊……」

「——リュウイは、喧嘩っ早かったけど腕の立つ長剣使いだった」
ロングブレイド

唐突に、築寺が口を開いた。

俯いていて表情は伺えないが、棚に凭れかかっている男の声は、どこか虚ろで、寂しさを持っている。

「ユウマさんは、厳しかったけど統率力もあって…アスカは家族想いの優しい女の子だった…」

「築寺先生…？」

隣の少女が訝しむような声音で尋ねようとする。しかし、

「殺したのは、アラガミだろうさ。でも——」

僕が殺したも同然だよ、と彼は虚ろに言葉を紡ぎだす。虚ろだが、悔やむような響きを交えて。

「片足半分持つてかれただけで、何になるって言うんだろうねえ…」

さつきから人を食った様な態度だった彼の様子が急変して、二人は啞然とし、出る言葉もなかった。

「…ああ、関係のない話をしてしまったね、すまない」

それに気付いた築寺は、自嘲するように苦笑を零し、眼鏡を押し上げる。

「さて、ここからは本題に入ろう」

そして今まで通りの態度に戻った眼鏡の男は、二人にそう告げた。

「今日、ソウヒ君達が遭遇したスサノオは、知っての通り第一種接触禁忌種に分類されるんだけど、それが何故だか分かるかい？」

元々座っていた一人掛けのソファーへと座り直し、築寺は膝に肘をつく。

「通常のアラガミより凶暴だから？」

「不明な点が他種と比較して多いからでしょうか……？」

二人がそれぞれの考えを口にするが、築寺は愉快そうな笑みを浮かべて首を横に振った。

「残念でした……とは言い切れないけれどねえ。正解ではない」

コホン、とわざとらしい咳をしたあと、彼はソファアの傍に積み上げられた、サイズも色も不揃いなファイルの山に手を伸ばし、その中から一枚の、赤い表紙の物を抜き出す。

安定を保っていたファイルの山は、音を立てながら崩れてしまった。

「偏食場パルス……全てのアラガミが持ち、常に発生している電磁波のようなモノでね。オラクル細胞や偏食因子を不安定にせる性質があるのさ」

ファイルを広げ、書類の一枚一枚を見ながら彼は説明を続ける。

「君たちが使う神機も、微弱ながらそれを発生している。一般種のパルスは微弱だから、神機のパルスで十分に相殺できるんだ。けれど、指定禁忌種のパルスは非常に強力で、神機では相殺しきれない」

だから……と築寺は既に冷えきっている、残り僅かのコーヒーを飲み干した。

「禁忌一種のパルスを相殺するための何かが必要なのさ。そして、つい最近開発されたのが、この、対指定接触禁忌種用偏食場パルス相殺装置、通称『ソロモン・リング』」

一枚の書類を抜き取り、顔の高さでかかげるテンロウ。

——ソロモンの指輪——旧約聖書に登場する、大天使より授けられし黄金の指輪——。

アナグラにいた時に一度、榊博士の部屋で文献の整理を手伝わされた経験のあるソウヒは、その時何かの本でそれを目にしていた。確か、魔除けだとか悪魔の使役に使われたと書いてあったハズだが、あまり詳しく覚えてはいない。

「オラクル細胞による物だけど、適合審査とかは要らないから安心してくれていいよ。ただ首に巻くだけだからさ。調整はしたいから、次の出撃までには用意しておくよ」

それじゃあ、と、テンロウはソファから立ち上がる。しかし、傍らの少女がそれを遮った。

「あのっ…えっと…ソレは、どういった仕組みなんですか？」

遠慮がちに問うアイラ。心なしか、彼女を見るテンロウの目がいつにも増して鋭く見える。

「とてもいい質問だけど、残念ながら、詳しくは答えられないかな。何せ、使い方によっては少しばかり“危ない真似”ができてしまうんでねえ…」

回答を避けた築寺は、不快感を煽る様な笑みを浮かべていた。

「まあ、リングが相殺する訳じゃないって事は言ってもいいかな？ 正確には、神機のパルスを増幅させているんだ。だが…皮肉なものだ。自ら細胞を取り入れる上に、こんな物まで付けて…」

アイラから視線を外し、黒縁の眼鏡を掛けた男は再び天井を仰ぐ。

「神は、神にしか殺せないのかねえ？」

それはつまり、アラガミと神機使いの事だろうか。

オラクル細胞を自ら受け容れ、アラガミに近づく事で人は彼らを倒す事が可能となり、そして、より強いアラガミを倒す為に、神機使いはアラガミのその性質を相殺する道具を得て…

「もう充分だろう…。蠟の翼、溶けてからでは手遅れだと言つのに……」

悲哀に満ち溢れたその言葉は、誰に向けられた言葉だろうか。

しかしそんな意味深な台詞に気を取られたソウヒは知らなかった。

傍らの少女が、目を伏せ、表情を険しく曇らせていた事を。そして、天井を見ていながらも、その少女を横目に捉えた白髪の男が、凄惨な、歪んだ笑みを浮かべた事を。

第11話―禁忌を破る為の力へソロモン・リング（後書き）

その他

一般種

基本種、墮天種、無指定接触禁忌種の総称。

指定接触禁忌種と区別される時に使用される事が多い。

指定接触禁忌種

一般種よりも強力な種のアラガミ。

第一種と指定されるスサノオ、アマテラス、ツクヨミ及び、二種とされるゼウスやヘラ等も是に該当する。

危険なのは特異な攻撃パターンだけでなく、狂暴凶悪な気性をしている。また、非常に強力な偏食場パルスが発生しており、それを遮断する手段を持たない神機使いは接触を禁止されている。

対指定接触禁忌種用偏食場パルス相殺装置

通称『ソロモン・リング』。極東支部で運用される指定接触禁忌種の装置。首輪型で、着脱も可能。だが、強力な指定接触禁忌種との戦闘は部隊長クラスの實力がある者にしか認められておらず、現段階では一部の神機使いにしか普及されていない。構造の詳細についての記述なし。

偏食場パルス

アラガミ及び神機が発生している特殊な波場。周囲のオラクル細胞や偏食因子に影響を及ぼす。

一般種のパルスは神機のパルスで相殺が可能だが、指定接触禁忌種

のパルスは相殺することが不可能と言う事が判明している。

偏食場パルス：2

遮断する手段を持たない神機使いが是を断続的、または継続的に浴び続けると、神機及び体内のオラクル細胞が変調を来し、精神崩壊、最悪アラガミ化を起こすとの報告がある。

第12話―兆し

極東エリア中央、旧・日本国中部地方に建てられた別働隊拠点『ベース』は、アナグラの様なアラガミ装甲で外周を囲まれている。人口、凡そ二千人。

アナグラより小規模ではあるが、立派にアーコロジとして成り立っているこの施設で暮らすのは、極東支部より移動・移住してきた者や、アラガミの魔手から逃れここに辿り着いた者。

――アナグラの許容外の避難民を収容、且つアラガミの攻撃を少しでも分散する――

襲撃の集中するアナグラを拡大するのではなく、遠くはないが一定の距離がある土地に、新たに施設を造る。

それならばと選ばれたこの市街地跡。ある程度の規模があつた都市の跡地には、多少なりと資材や物資が残っているのだ。

「（そしていずれはこの施設も大きくなり、今より多くの人々を受け入れられる様になる…）」

施設の屋上に立ち、嫌なくらいに晴れ渡った青空を見つめる少年――片桐アキは、一人未来を想像する。

蒼天を見つめるグレーの瞳は寂しげに細められ、瞳と同じ色をした癖の強い髪は、乾いた風に淡々と舞い踊る。

「（遮るモノは、切り払う…どんな手を使つても…）」

いったいいつからだろうか？人を想う事など面倒だと言っていた自分が姿を眩ましたのは。

少年の表情が自嘲気味に歪んだ。しかしそれも一瞬、漆黒のロングコートを翻し、彼は静寂に満ちている蒼空の下を後にした。

コートの袖から覗く右腕では、赤色の腕輪が鈍く重く光を反射していた。

ベースの装甲壁の外には、捕喰によって所々穴の空いた、廃れ荒んだ市街地が広がっている。その光景は、アナグラの北東部に位置する市街地跡に似る所があるだろう。

数十年前までは旧・日本首都「トウキョウ」と並ぶ程の都会であったこの街も今では、食い破られた高速道路や線路、穴が空けられて今にも倒れそうな高層ビル、汚濁した水に濡れた噴水池が残るばかり。

アスファルトの所々に空けられた巨大な穴が、明かりを失くした地

下の街にとって唯一の光源となっている程で、当時の賑わいはもう欠片も存在しなかった。

全ての痕跡がその機能を失い、最早ただのオブジェと化している街。そんな、静寂に包まれたゴーストシティの一角——昔は大通りとして賑わっていた区画で、神機使い達は戦っていた。

「はあっ！」

スサノオの一件から一週間が経とうとしていた。

黒い髪の少年は、握り締めた巨大な鋸『野狐斬り』で、今まで狙っていた標的——人が蛹になった様な出で立ちのアラガミ『コクーンメイデン』を縦に叩き割る。

「ソウヒ、右！！」

「オーライっ」

同僚に掛けられた声に応え、紫色の制服に身を包んだ少年は大鋸を後ろに引いた。迫り来る針の群れを横目に捉えながら、少年は紺碧に染められた大剣『野狐斬り』を体を軸にし振るう。

乾いた金属音が響いた。

彼を狙った巨大な針は、軌道を変えられ彼の正面のコクーンメイデンに突き刺さる。

一方で少年は、大剣を振るった勢いで跳躍し、神機を空中で変形させていた。跳躍の高さが頂点に達した時には、神機は銃形態に。零式キャノンの巨大な銃口を威嚇するオウガテイルに向けた少年は、躊躇い無くトリガーを引いた。鬼面模様の強靱な尾から放たれた、ひどく鋭利なニードル群を銃撃の反動で交わし、その身をコンクリートに降ろした頃には、オウガテイルのその下顎から突き出す牙も白い体毛に包まれた巨体も、全てが粉々に砕かれていた。

「っと…後はヴァジユラが二体か…」

辛うじて残っていた亡骸を捕喰しながら、ソウヒは独り言の様に確認する。

今日彼らが課せられた任務は、ベース近辺旧都市部に現われたヴァジユラ二体及び小型アラガミ複数の討伐。

「来た！」

背の側から響いたソラの声に辺りを見回すと、新たな標的は彼らの遙か頭上、錆付いた鉄骨がむき出しになっているビルの上にいた。捕喰により階数が減らされていても、地上二十階強と言えば十分な高さがある。

いったいどこから登ったのかは知らないが、高くから見下すその虎の様な出で立ちをした獣神は、自らが頂点だと言わんばかりの体でそこに君臨していた。

「何様のつもりだろうなあ…荒神様ってか？」

何かしら皮肉の一つも言いたくなかったソウヒだったが、それは背後のヒイラギも同じだったらしく、台詞を奪われたソウヒは相槌代わりに苦笑いを浮かべた。

バチバチバチッ――

しかし突如背後から降り注いだ不快音に冗談を言える空気は掻き消され、身の危険を感じた三人は三様に跳び退く。背後にいたのも、獣神。電気を帯びるマントから放たれた雷撃は、神機使い達が立っていたコンクリートを粉々にした。

「挟み撃ち……！」

「やる事がせけえな、神獣の名が廃るだろ？」

不意討ちに対して苦い表情を顕わにするソラとヒイラギ。

「上^{ンチ}は任せたぜ！」

舞い上がった砂塵の所為で視界が酷く悪い。

粒子の壁の向こう側から届いたソウヒの声に短く返事を返すと、二人は再びビルの上を睨んだ。

鉄の塔の頂きから、獣の王が跳躍する。抗う者を肅清する為に、少年と少女を喰らう為に。

しかし、是が好機と言わんばかりの笑みを浮かべるヒイラギは、彼専用のスナイパー——深緑色に塗装された、彼の身の丈を優に超える長さの細身で角張ったフォルムを持つ銃身——『コメッツパーセージ』を天に、襲いくるヴァジュラに向け、

「迎え射つ！」

瞬時に狙いを定めトリガーを引いた。

放たれた貫通レーザーは虹色の尾を引きながら神獣の眉間に吸い込まれ、その内側を蹂躪していく。

「解放……」

ボソリと呟いたソラ。ヴァジュラの着地してくるだろう場所にて、彼女は神機の切っ先をヴァジュラに向ける。同時に、パーツを押し退け神機の内側から黒く蠢く顎が姿を現わした。

迫る獣の咆哮。幾つもの命を狩り捕ってきたであろう牙は目前にある。

「喰らえっ！！」

普通なら、着地後の隙を狙うだろう。しかし、彼女はそうしなかった。

勢い良く神機を突き出し、落下するヴァジュラに噛み付かせたのだ。

「あああああああ！！」

顎は見事に、神獣の顔面に食らい付いている。少女の身体は、込み上げる膨大な力と衝動に歓喜した。

そして彼女はその直感と本能のままに、自らの何倍もある獣を、
“投げた”。

獣が自重と重力に従う前に。抵抗を示す前に。

縦に、背負い投げるように、振りかぶるように、

叩きつけた。

轟音と共に、背を地に打ち付けるヴァジュラ。その顔面は、既に獣の王たる堂々としたそれではなくなっている。

——バーストモード。神機の中の“アラガミ”を解放しアラガミを喰わせる事で、神機使いの身体能力は一定時間飛躍的に上昇する。

「それでも、やりすぎな気はするけどな……」

舞い上がる粉塵を背景にやってくるソラを見て、ヒイラギは率直な感想を述べた。

長年この少女と連んでいる彼でも、ヴァジュラの巨躯が宙を舞う光

景は見馴れていない。

「…」

「赤くなるな、褒めてねえよ」

「…」

「あからさまにしょぼくれるなよ…ってかアイツ、まだ黙ってねえだろうよ？」

砂煙の向こうで、アラガミが立ち上がろうとしていた。

「さて、後半戦開始だぜ」

言葉と同時に放たれた光線が神獣の挟まれた頭部に穴を穿つと、その穴にソラが神機を突き立てる。彼女を振り払おうと暴れる獣の巨大な爪は、ヒイラギが放ったレーザーにより尽く撃ち弾かれた。

「はあああああああああ」

細い身体から発せられているとは思えない程の猛々しい叫びとともに、少女は突き立てた神機を横に振りぬく。

痛みに仰け反るヴァジユラ。左目を裂かれたそのの、苦痛に満ちた咆哮が辺りに響いた。

これぞ好機。

ソラが、仰け反り晒された神獣の胸から腹を縦一文字に斬り裂き、そのまま後肢に舞い踊るように連撃を刻む。一方でヒイラギは、ヴァジユラの右側に周り込み、アンプルのピン片手に細い光の雨を浴びせ、ヴァジユラの注意を絞らせない。

呆氣ない、と言っしかないだろう。

苦し紛れに撃ち出される雷球は的を射ることなく、その激情を表している様な雷は呆氣なく交わされ、拳は虚しく空を切るばかり。しかも、そうしている間にも二人の神機使いによる攻撃は続いているのだ。

ついには砂煙を上げながら神獣は膝を着いた。後肢に蓄積したダメージが許容範囲を越えたのだろうか、下半身が沈み、前脚だけで辛うじて体を支えているその姿は酷く滑稽だった。

「もらった！」

勝利を確信するソラは、身動きが取れないヴァジュラに容赦なく乱舞を刻み込んでいく。

十秒もなかった。十秒もかからない内に、神獣はただの細胞の集まりになっていった。

神機を肩に担ぎ、ヒイラギは先程

「さて…あっちの援護にでも行くか？」

「派手にやるなあ、おい…」

時間を少し遡らせて。

轟音は、もう一人の少年の方にも届いていた。

再合流を防ぐためずいぶんと引き離れたので何が起こったのかは分からない。普通の戦闘をしていない事は音を聞くだけで明らかだ。

「ま、コツチは確実に行かせてもらっぜ…」

無茶はできない。まだ本調子でも、全快してもないのだから。

最小限で、爪を避ける、牙を交わす。

しかしそれに付き纏う違和感。

左足だった。

いつからだったか、痺れた様な、痛みに近い感覚がしつこく居座り続けている。

「そんな苦じゃあ、ないけどなあッ!!」

雷撃後の隙を突き、顔面を叩く。

ソウヒが神機使いになってから、体調不良は当たり前だった。吐き気に襲われていたり、頭痛に見舞われたり、節々が痛かったりが毎日。ゆえに片足の痺れ程度、なんでもない。どうせまた、高すぎる適合率から来る変調なのだ。

頭を叩かれ、怯み後退るヴァジュラ。序盤は挟み撃ちなどされペースを乱されたが、分断してからの一対一となれば戦局はもうこちらの掌中。

斬撃の流れに乗せて変形、射撃、反動で間合いを取って再び剣にと、そうして順調に相手の体力を削る。そうしてしばらく、なかなか早いペースでヴァジュラも弱ってきた頃、

「よお、手伝いに来たぜ」

新たな方向からヴァジュラの左半身を熱線が襲った。差程の威力もないそれでも敵の注意を引き付けさせるには十分で、ヴァジュラは新たに現われた獲物——ヒイラギに興味を示した。

仕留められる気配がない方より、まだ可能性のある方を選んだのだろう。

しかし、ヒイラギに向けて跳躍したヴァジュラの背中に刃が突き刺さる。

突然の思わぬ方向からの攻撃に、ヴァジュラの姿勢が乱れた。

打ち付けられる様な形で着地に失敗したアラガミの後ろに、短剣を引っ提げた少女が降り立つ。

「アニメかよ……」

呆れるソウヒ。

一般の神機使いより多く与えられた休暇に、暇つぶしにと漁った動画サイトで見かけた、ド派手で有り得なさそうなアクションのある動く絵の映像を思い出す。反撃も、動く事すら叶わず、地面に崩れたままの神獣。どうやら先の一撃が止めとなったらしく、腹ばいに伸びた様な体勢で動かなくなってしまった。

「常識的に考えて、跳んでるヤツを突き落とすのは無しじゃないか？」

表情が引きつり笑いの域に達しているソウヒは、涼しい顔の少女に

訪ね掛けた。

「
…」

「常識なんて、コイツらが出てきてこんなのができた時にはなくな
アラガミ
つてたさ」

無言で首を傾げたソラの代わりに、口を開いたヒイラギがヴァジュ
ラを神機の手で突きながら笑った。

「さ、帰ろうぜ。用もないのに居座る意味はねえだろ？」

「そうだな。ちょうど、迂闊に歩き回れないアラガミに同情したく
なってきたトコだ」

「どんなだよ」

下らない事を言いながら、彼らはベースへと歩き始めた。

——今日の彼女は、何か違った。

違和感に気付いたのは、帰投してからしばらく後、窓から傾き始めた夕陽が差し込んだ頃だった。

ヒイラギは、自室に戻ってからゆったりしたシャツと長めのハーフパンツという格好でベッドに倒れ伏し、少なからず疲労の蓄まった体を休めていた。

微睡んだ思考の中、今日の戦闘をなんとなく振り返っていて、ふと気付いたのだが、違和感と言う概念より先が分らない。

そして彼女と十何年も過ごしてきて、この世で一番彼女を知っている自分が分らないことに、さらに違和感を覚える。思いが不安に変わるのに、時間は掛からなかった。

さすがに飛び出しはしなかったが、それでも部屋着のまま向かいの幼馴染みの部屋に向かったヒイラギ。

「ソラ、いるか？」

軽く戸を叩いてみるが、反応が返ってくる様子がない。もしかと思ってノブを捻るが、美しい木目の開き戸は動く気配を見せなかった。焦りが膨らみ始める。

「朱宮だったら、屋上だぜ」

突然。

背後からかけられた声に驚き振り返れば、

「片桐……」

鈍い灰色の、中性的な少年が、人懐っこい笑みを浮かべながら立っている。

「ってかどうしちゃったの？えらく顔色が悪いけど。もしかして禁断症状とか？相も変わらずベツタリだよなあ……」

「うるせえ」

朗らかな笑顔には到底合わない悪意ある言葉の羅列に、ヒイラギはアキを睨み付けた。

「ははっ、せいぜいしっかり繋ぎ止めとけよ」

「……」

反論もせず、アキの横を通り過ぎ早足で立ち去るヒイラギ。彼が去っていくのを背中で感じながら、アキは独り言の様に呟いた。

「手遅れになる前に、な……」

「……ソラ？」

非常階段の扉を開くと、茜色に染まる景色が彼を出迎えた。
エレベーターを待つのもどかしく非常階段を使ってきたのだが、
結局は焦れに後押しされて途中から駆け上がる事になってしまった。

「よかった、ココに……」

目当ての少女は、屋上の真ん中、ヘリポートの「H」のマークの上
で、白いワンピースに包まれた背をこちらに向け佇んでいた。
彼女がワンピースを着るのは、非常に珍しい。その事が、彼女に対
する違和感の存在を確実にした。

「何かあったのか？」

緩やかな風に黒髪を踊らせる少女に、ヒイラギは歩み寄る。そして
ヒイラギの気配に気付いた彼女が振り返り、

「…今日のお前、なんかいつもと違った様に……ッ!？」

ヒイラギは言葉も途中で硬直する。待てよ、と。
目の前の彼女を見て気付く。

——確かに彼女は色白だが、今の肌の色はいくらなんでも白すぎな
いか?と。——確かに彼女は口数が少ないが、それでも話し掛けて
からずつと無言なんてあったか?と。

そして、

——既に茜色も通り過ぎたこの空色で、なぜ瞳が赤く見えるんだ？
と。

第12話―兆し（後書き）

人物

朱宮ソラ：2

（16）

2066年フェンリル極東支部入隊。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。

2060年に発生した外部居住区在住一般人アラガミ化事件で、アラガミ化した父親に襲われた過去を持つ。

神機：ショートブレード（旧型近接式）

第13話―戻れぬ路

「どうしたの、ヒイラギ？」

澄んだアルトボイス。
落ち着いた少女の声。
全てがいつもと同じ。

「…………え、いや……」

錯覚でした。なんて、そんなオチがあって堪るか。しかしそれが現実であった。

目の前にいる少女は、いつもと変わらない陶器の様な白く美しい肌と黒く澄んだ瞳で、ちゃんと彼に伝えてくれる朱宮ソラだったのだから。

「どう？」

少女は笑った。

白いワンピースを纏う少女は、楽しそうに笑いながらその場でくるりと回って見せる。膝下丈の長めのスカートが――健康的な脚線のみを晒す程度に――翻えた。

「……」

動けなかった。

彼女に見惚れた事も認める。だが、それ以上に目の前の事象に頭が追い付かない。

何が起こった？

何が起こっていなかった？

「……ヒイラギ？」

何の反応もない少年を、心配そうに覗き込むソラ。

自分が呆けていたことに気付き、ヒイラギは慌てた。

「ああ、わ、悪い…似合ってるよ、それ」

「そう。じゃあ――」

揺らいだ。

目の前の、珍しくはっきりと嬉しそうに笑みを浮かべた少女が、ぐらりと揺らいだ。

「――ッ！？ソラ、ソラ――！」

糸を切られた操り人形のように、ぱたりと倒れこむ彼女を抱き留めたヒイラギ。

予想できなかった現状は、少女の重さと冷えた肌となって彼にのしかかった。

「軽い貧血、か……」

言い渡された結果は、ヒイラギが眉間に皺を寄せるには十分すぎるモノだった。

突然倒れたソラは、その後ヒイラギの手で病室に運びこまれた。しかし、日没頃に運び込まれた彼女は日付が変わる頃にも意識が戻らず、ついにはそのまま東の空が白みだしてしまった現在。

「にしてはおかしくないか？」

入院服に着替えさせられ、寝台にて眠り続けるソラ。その傍らで丸椅子に腰掛け、意識の戻らない彼女を寝ずに見守り続けるヒイラギ。

そんな彼の背後で、つい先程部屋に入ってきたもののしばらく沈黙し続けていたソウヒが、ポツリと呟いた。

「何もなかったのか？もつと、こつ、違和感みたい——」

「あつたさ」

ふっ、と鼻で笑うようにして、ヒイラギはソウヒの言葉を遮った。

「……違和感なら、昼間からあつたさ…気付いたのは、ずいぶんあとだったけどな」

明け方の冷えた風が開け放たれた窓から入り込み、目醒めない少女と、為す術のない少年たちをなぞっていく。

ヒイラギの声音は、ひどく自嘲的だった。

「結局何にせよ、俺が気付いてやらなかったからだ。俺が気付いてやらなくて、ソラは…」

「それは、何様のつもりだい？」

冷たい響いきの新たな声に慌てて振り向いたのは、ソウヒだけだった。

開き戸は完全に閉じられていなかったのだろう。戸を押して音もなく部屋に侵入した白衣の男は、不快感を煽るようなニヤケ顔でソウヒの隣に並ぶ。

「ずいぶんと自己中心的だと思わないかい？君は彼女の何だって言うのかな？」

「……」

「なんてね。食って掛かってきてくれよ…せつかくの憎まれ役っぽい登場が台無しじゃないか」

整えられていない、ぼさぼさな髪型の眼鏡男―築寺テノロウは、ニヤけたまま肩を竦めてみせる。平常心を保っている人の、十人中十人を苛立たせられそうなくらい、その動作は胡散臭かった。現に隣でそれを見てしまったソウヒも例外に漏れる事なく苛立った。眉間にシワが寄るくらいに。

ヒイラギが、胡散臭そうに尋ねた。

「……何の用だよ？」

「ん？ちよつと忠告をね」

わざとらしい咳払いをはさみ、白髪の男は眼鏡を中指で押し上げた。

「彼女、しばらく神機を握らせちゃいけないから」

「……」

俯くヒイラギの、伏せられていた目が見開かれる。

「予測ではあるからはつきりは言えないけど、オラクル細胞絡みの問題が起こっている。貧血は、ない。もしくは強いて言うなら二次的な物だろうね。だから、戦闘は――」

「できるわ」

ゆつくりと、少女が体を起こした。

「ただの立ちくらみ。何も問題ない」

「立ちくらみって、既に貧血でも——」

「そんなレベルじゃねえだろ!？」

引きつり笑いのソウヒを押し退ける勢いで、ヒイラギが立ち上がる。

「大丈夫よ」

「見りゃ分かる!大丈夫じゃなワケな——」

『——!——!』

語気を荒げるヒイラギだが、しかしその訴えは無機質な警報によって掻き消された。

「…敵襲か？」

「ハンニバル他小型種複数だ。市街地跡で暴れている。出れる奴は準備をしろ」

ソウヒの呟きに答える様にして新たに割り込んだ声。

開け放たれた病室の扉の前には、声の主である灰色の少年・片桐がいた。

「ハンニバル？」

「先日確認された新種だ。雷・氷属性装備もしくは対炎属性装備を準備しろ。炎を自在に操る、既存のタイプとは一線を画するアラガミだ」

他の細かい事は後で説明する、とそこまで早口にまくし立て、片桐は扉の死角に消えた。

「時間はなさそうだね…」

「俺とソウヒの二人で出る。ソラはまだ休んでろ」

「嫌。わたしも行くわ」

「駄目だ！同じ事何度も——」

「どうせヒイラギだもの。わたしがいない事を理由にして無理をするでしょう？」

既に立ち上がって、サイドテーブル上の着替えに手を伸ばす少女。

「どうせあの人やナナリー達もいるんでしょう？わたしはサポートに回るから」

「……」

そこまで言われてしまうと、ヒイラギには反論できない。もともとソラに対して過保護な彼には、「ソラが白と言えば黒でも結局は白と言う」様な節があるのだ。

「…僕としては出撃して欲しくないんだけどねえ…オラクル細胞は不明な点が多いし」

「ありがとう、先生。でも大丈夫」

「何が起こつてもいいのかい？」

「ええ」

無表情に頷くソラ。

「…先に行つてる」

苛立つた様子を露に、ヒイラギが扉の外に消えた。
それを追う様にソウヒも、築寺とともに病室を後にする。

「ずいぶんと自由なんですね？」

「医療方面にはイマイチ疎くつてね。どうせもう止められない……
それに、彼女達にはいい機会だ」

白衣の男の口から漏れた言葉がどうにも物騒で、ソウヒは嫌な予
感がしてならない。

「まあ、さすがに事が荒だつたろうから。その時は、彼らを手助け
してやってくれるかい？」

「おはよう、まさかこんな形で初出撃になるとはね」

凜々しい女性の声。

ベースのエントランスフロアには、四人の神機使いが集まっていた。

一人はソウヒ。そしてもう一人は、浮かない顔のヒイラギ。

「確かに」

苦笑混じりに相槌を打つソウヒの前には、一組の男女がいる。エントランスのカウンターにもたれかかっている、胸元の開いた、ゴシックファッションの様な服に身を包んだ金髪の女性は、ナナリー・コールレム。大人の女性と言うのが相応しい雰囲気纏う彼女は、背も高くはつきりとしたスタイルの持ち主だった。透き通った碧の瞳は鋭さを帯び、色白な肌に、腰まで伸びた長い金髪は毛先で緩くウェーブを描いている。

「らしくないな。シケた面だ」

静かに、しかし責める様な調子の言葉を発したのは、フロアのソ

ファに座る青年、シリウス・バグだった。

ひたすらに黒い髪と、対照的な白すぎる肌。必要以上に黒い瞳は同色の前髪に紛れ、全体的に細い印象を受ける。

着用するジャケットもスラックスも余裕の少ない物で、基本黒一色。座っていて判りづらいが、立つと一本の黒い棒のようになるというのがソウヒによる見解だった。

「……」

「……」

唐突に訪れた沈黙。

言葉を向けられたヒラギには、返す台詞がない。が、言葉を発したシリウスも言葉を発する気配がない。

「……相変わらずの無責任さね」

ナナリーが心底おかしいと言うように笑う。ソウヒも、つられる様に苦笑いを浮かべた。

初めて顔を合わせた時にも起こった現象だ。その時と異なるのは、ヒラギがツツコミ役として機能していない事か。

シリウス・バグという青年は、寡黙だ。と言うか会話をしようとしなない。話を振っても単語が返ってくるだけだったり、話かけられたと思ったら次の反応がなかったりと、何がやりたいのかさっぱり分からない。お陰でだろう、神機使いとして優秀でも、友人は異様に少ない。

「あなたが喋る番じゃないの？何か言いなさいよ。それが、会話をする気がないなら喋らないでちょうだい」 笑い混じりの非常に辛辣な言葉が、果たして青年にどれだけ意味のあるものとなっただろ

う？マイペースな彼には間違いなく皆無だろうとソウヒは踏んでいる。

「お待たせ」

いつもより細い、アルトボイス。

振り向いた四人の中で唯一、ヒイラギが表情をしかめさせた。肩を竦めたのはナナリ！。呆れる様な素振りを見せた彼女は、平坦な口調で告げる。

「…それじゃ、移動しましょう。ヘリが待機してるわ」

「ミーティングを始める」

ヘリのプロペラが空を切る音の中、今まで見たことないくらいに真面目な、と言うか冷えた雰囲気纏う片桐がクリップボード片手に切り出した。

「目標はハンニバル。観測班の報告では、現在は旧市街地エリアの北側、ビル跡の少なくなつた地帯を小型種数体と徘徊しているらしい。遭遇例はアナグラの調査隊の一度のみで、現段階では相手が火属性を扱う事、敏捷性が非常に高い事、一方で氷属性や雷属性に弱い事しか判っていない。既存のアラガミのどの種とも似つかない攻撃パターンを持っている。火球や火柱による攻撃の他、炎を剣状にもできるらしい。各自ある程度動きを把握した上で、交戦するよう」

そして機内のシートにボードを放り投げると、彼は神機を手にとった。

「今回の任務では、錦川と朱宮の二人は周囲に確認されている小型種の排除を最優先に行動するように。ヤツには他四人だけで当たる手を抜く事のないように」

ヘリの側面ドアをスライドさせる片桐。

眼下に広がったのは、変わり様のない、空と大地だった。

「以上、開始のタイミングは各自に譲渡する」

言い終わると同時に、片桐はその身を宙へと投げ出した。

第13話―戻れぬ路（後書き）

人物

シリウス・バグ

（20）

2066年フェンリル極東支部入隊。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。

神機使いとしては平均以上の優れた能力を持っているが、コミュニケーション能力に欠如している点が見られ、感情を表に出す事も少ない。

神機：ロングブレード（旧型近接式）

ナナリー・コールレム

（19）

2065年フェンリル極東支部入隊。

2071年フェンリル極東支部中部特殊別働隊転属。

突出した能力はないが、優れた戦術理論を持つと同時に、独自のバレットによる陽動・攪乱から遠距離での狙撃、隠密行動の全てをこなせるオールラウンダー。遠距離の神機をして、参加する任務を選ばない。

神機：アサルト（旧型遠距離式）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0634o/>

GODEATER—Go on STRUGGLING

2011年12月3日21時53分発行